

香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA



第5号

Okt. 1996

目 次

領事クラス・フィッツェさんのこと	会長 細川 清	1頂
ボン独日協会の創立20周年記念式典に参加して	高木文夫	2
「二人の日記から」(ボン独日協会の創立20周年記念式典に参加して)	高木伸子・悠平	7
「Bonnで授かった宝物」(ボン独日協会の創立20周年記念式典に参加して)	中村敏子	11
香川日独協会「フェスティバル[第九]」を後援	編集担当	15

[会員だより]

近況「このままでいいのか? 私達の社会は!」を考えると	笠井 強	19
環境とくらしへの心くぼり(マルマルクでのくらしの体験から)	中山 充	22
ホームステイのすすめ	高木美恵子	28
クリスとの1週間	山田美智子	30
わが友・杏土玲亜・別花亜	水谷好子	36
ドイツ語と私	虫本光徳	38
思い出のドイツ旅情	今田 求	41
私のドイツ随想録	真鍋賢二	43
ドイツ在外研究の思いで	西原 浩	45
春の旅—中欧の旅	乗松達郎	47

[ドイツ文化紹介]

《訳詩四編》	田淵昌太	68
--------	------	----

[FENSTER]

ドイツ連邦共和国	編集担当	70
----------	------	----

[お知らせ]

在ドイツ日本人会などについて	編集担当	72
ホームステイの募集について	編集担当	75

(表紙): ヴァイスマー 古い港(メクレンブルク=フォアポメルン州: ドイツ北部)

旧ハンザ同盟都市リュベックとロストックの中間に位置した東海岸のヴァイスマーは人口約6万を数える港町であり、町の中核には14/15世紀建造の3教会があり、中でもニコライ教会の身廊はドイツ第3の長さ誇る。

三十年戦争後町はスエーデン国の支配下に歸したが、スエーデンにとって維持費が高くついた関係で、1803年メクレンブルクに割譲として返却されるが、その割当もそれから100年後には撤回されるに至った。

今日また古い港「デア・アルデ・ハーフェン」には多くの船が行き来する様になり、造船や漁業の他に、東海岸の各地へ旅客輸送業が増加を示す筈である。

(ドイツテレコム株式会社の「ドイツ連邦共和国 写真観光旅行ガイド」より)

香川日独協会会報 第5号 1996年10月発行
発 行: 香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA
〒761-07 香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川医科大学ドイツ語研究室内
TEL (FAX兼用) 0878-91-0822
発行責任者: 細川 清、 編 集: 多田 佳代、藤本 康夫、 ワープロ文責: 藤本 康夫

領事クラウス・フィーツェさんのこと

Klaus Vietze

会 長 細 川 清

香川日独協会も発足して5年になりますが、今年は、とくに駐大阪・神戸ドイツ領事クラウス・フィーツェさんに色々な面でお世話になりました。先ずこの日独協会報の紙面をかりて厚く御礼申し上げる次第です。

私は、このいわば公式的な御礼の言葉を単にここで述べるために寄稿したわけではありません。クラウス・フィーツェさんと知り合ってから、ほんとうに、この方の人柄がドイツの或る典型を私達に示しているのではないかと、深く感銘しているために、こうして書いている次第です。

フィーツェさんの滞日は、一年半前のあの阪神大震災と時をほぼ同じくして始まりました。地震など経験したことのない八歳の息子さんは、「遊園地みたい」と、ベットの上で揺られていたそうです。三宮にあった領事館は、天井が崩れ落ち、ビルそのものが取り壊されました。東灘区の自宅は幸い無事でした。

フィーツェさんは、東ベルリンの出身です。「モンゴル学者の父と、中国学者の母から、東洋の国々の話を聞いて育った」と、加藤祐子さんが、新聞の「ひと」の欄に書いておられます。

日本との関係は、交換留学生として東海大学で学ぶことから始まったようです。

今申したように、東ベルリンの出身のそれは別として、両親が、彼の若い時から、東洋の研究者であったことが、のちに日本願望を彼にもたらしただのではないかと思います。そして、彼の風貌に、どこか東洋の血を、雰囲気を感じるのは、私だけでしょうか。

「外交官として日本に再度戻ってくることはほんとうにうれしいね」と、静かな声ですが、とてもドイツ人とも思われない流暢な日本語が私に返ってきます。なんでも、ほとんど、不自由なく日本語を聞き、話せます。私は、彼の周りに、ドイツの秀才を感じます。

目下の日本の社会的情勢についても鋭い視線と視角をもって、「先生、介護制度について、ドイツの制度について、一度高松で話してもいいですよ」と熱っぽく語り、その言葉通り、去る5月10日、りっぱな講演をしてくれました。

色々の方面に造詣が深く、かつチャメツ気たっぷりで、飲み、食い、みんな楽しい、というタイプです。高松をほんとうに好きになってくれていて、他の日独協会以上に深くつきあって貰っています。もう一度御礼を申します。

Vielen Dank!!

ボン独日協会の創立20周年記念式典に参加して

香川日独協会が姉妹縁組をしているボンの独日協会は1976年5月戦前旧制松本高校（現信州大学）で教鞭をとられていたヘルベルト・ツァヘルト博士（初代会長）、ワルター・アードラー博士（前会長）らを中心に創立されましたが、今年創立20周年を迎えて記念式典が4月29日午後6時からボン大学にて開催されました。その模様を簡単にここに報告したいと思います。なお、香川からの参加者は中村副会長をはじめとして在独の人たちを含めて7名でした。

当日は夕方からの式典に先立ち、午前10時からボン市内にある日本庭園の一角で香川日独協会との姉妹縁組を記念して銀杏の記念植樹が行われました。これは一昨年両協会が高松で姉妹縁組の調印をした折り、高松市の中央公園の一隅に記念の縦の木を植えたことに応じたものです。朝早くにもかかわらずボン独日協会、香川日独協会のほか多くの関係者の方々の参加を得て、和やかに植樹が進行しました。作業に取りかかる前にはボン独日協会のディーツ会長のスピーチがありましたが、その内容は植樹される銀杏の木にちなみゲーテの抒情詩「いちよう葉 (Gingo Biloba)」(『西東詩集』より)を引用し、銀杏の葉が一枚でありながら、二枚のように見え、二枚が一枚のようでもあるとの比喻によって、日独両国およびボンと香川の両協会がすえながく友好的な関係にあるようにと強調されたものでした。植樹の後一同は緑豊かな公園の中を歩き、またライン河畔を歩いた後、議員会館の上階にあるレストランで昼食をとりながらこれからの両協会の協力関係を強めていくことを率直な意見を交えて話し合いました。

午後6時ボン大学（正式にはライニシェ・フリードリヒ・ヴィヘルム大学）の祝典用の広間で記念式典がトリオソナタの演奏とともに開始されました。演奏された方々もボン独日協会の会員です。音楽の後列席の各界の方々の挨拶と祝辞が披露されました。司会はボン独日協会のメンヒ事務局長です。最初は会場のボン大学を代表して同大学日本学科のパンツァー教授の挨拶があり、続いてボン独日協会を代表してディーツ会長が挨拶されました。この後有馬駐独日本大使がドイツ語および英語による、日独関係の強化、両国間の友好関係の発展を祈念する祝辞があり、ボン市の助役からもボン独日協会の20周年を祝い、両協会間の姉妹

縁組を祝福するスピーチがありました。ケルンの日本文化会館の上田館長の祝辞の後、香川日独協会を代表し、中村敏子副会長の祝辞が続きました。中村副会長の祝辞は「金比羅参り」の風習を紹介して香川への来訪を誘うもので、最初は日本語でしたが、後半では同じ内容をドイツ語で話され、聴いている人たちをうなりました。祝辞の締めくくりはドイツ学術交流会（DAAD）東京事務所のシュトゥッケンシュミット所長のユーモアを交えたものでした。シュトゥッケンシュミット所長はボン日独協会の創立メンバーの一人で長らく事務局長を務められました。氏の話は江戸時代からの日独関係の歴史を細かく述べたもので、どれほどドイツと日本の関係が歴史的に深いかを強調されたものでした。比較的長かったシュトゥッケンシュミット氏のスピーチに続いて、再び最初の演奏者による三重奏によって式典が締めくくられ、引き続き隣室で飲み物による懇親の集いが繰り広げられ、大勢の参加者がくつろいだひとときを過ごし、さらには会場を大学内の別の場所に移して食事をともにしながら懇談を夜遅くまで続けました。集まった人々は日本に在住したことがあるなど、日本との関わりの深いひとばかりでしたが、その中に香川からのホームステイを受け入れてくださった方々、香川へ来られた、あるいはこれから来ようとしている方々などおられ、私たちは再会したことや知り合いになれたことを喜び合いました。私たちの国や街に大きな関心を寄せている人たちがボンに大勢おられることを知ったことは私にとって大きな励ましとなりました。（高本文夫）

Feierstunde

20 Jahre
Deutsch-Japanische Gesellschaft
Bonn e. V.

29. April 1996, 18 Uhr
Festsaal der Universität Bonn

Musikalische Umrahmung:

Carl Stamitz (1746-1801)
Trio-Sonate op. 14 Nr. 1 in G-Dur
Moderato - Andante - Rondo

Grußworte und Festrede

Theobald Böhm (1794 - 1881)
Trois Duos après Felix Mendelssohn-
Bartholdy et Franz Lachner op. 33
pour Flûte, Violon avec Acc. de Piano
Allegretto non troppo - Allegro agitato -
Allegro non troppo

Ausführende:

Antje Bettina Fröhlich, Flöte
Yukio Fröhlich, Violine
Midori Nijiri-Winschermann, Klavier

Grußwort im Namen des Hausherrn
Prof. Dr. Peter Pantzer

Begrüßung im Namen der DJG Bonn
Präsident Wolfgang Dietz

Grußworte:

S. E. Botschafter Dr. Tatsuo Arima
Botschafter der Japanischen Botschaft Bonn

Dorothee Pass-Weingart
Bürgermeisterin der Stadt Bonn

Takashi Ueda
Direktor des Japanischen Kulturinstituts

Toshiko Nakamura
Vizepräsidentin der Japanisch-Deutschen
Gesellschaft Kagawa, Takamatsu

Festrede:

Dierk Stuckenschmidt
Leiter der DAAD Außenstelle in Tokyo
„Deutsch-Japanische Verständigung -
- wie alles begann“

Umtrunk

Dieses Baums Blatt, der von Osten
Meinem Garten anvertraut,
Gibt geheimen Sinn zu kosten,
Wie's den Wissenden erbaut.

Ist es ein lebendig Wesen,
Das sich in sich selbst getrennt,
Sind es zwei, die sich gelesen,
Daß man sie als Eines kennt.

Solche Fragen zu erwidern
Fand ich wohl den rechten Sinn,
Fühlst Du nicht an meinen Liedern,
Daß ich eins und doppelt bin.

GOETHE

いちじょう葉 (Gingo Biloba)

東の邦よりわが庭に移されし
この樹の葉こそは
秘めたる意味を味わわしめて
物識るひとを喜ばす

こは一つの生きたるものの
みずからのうちに分れしか
二つのものの選び合いて
一つのものに見ゆるにや

かかる問いに答えんに
ふさえる想念をわれ見いだせり
おんみ感ぜずや わが歌によりて
われの一つにてまた二つなるを

小牧 健夫訳「西東詩集」(岩波文庫)



Ginkgo im Japanischen Garten gepflanzt

Die Deutsch-Japanische Gesellschaft feiert 20jähriges Bestehen. Aus diesem Anlaß wurde gestern im Japanischen Garten des Rheinauenparks ein Ginkgo-Baum gepflanzt. Hierbei legten Gesellschaftspräsident Wolfgang Dietz und Vizepräsidentin Toshiko Nakamura ebenso Hand an wie Fumio Takaki und Junji Yamazaki (von links).

(kae)/ Foto: Heinz Engels

国際交流の意義再認識

◎香川日独協が高松で報告会◎

ホームステイの体験談も

ホームステイなどを通して日本とドイツの交流を図る香川日独協会(細川清会長)はこのほど、高松市内で「独日協会ボン二十周年記念式典」に出席のため訪独した中村敏子副会長らの報告会を兼ねた夕食会を開き、集まった会員約三十人

に国際交流の楽しさなどを語った。

くつろいだ雰囲気の中、中村副会長は「ホームステイは、学生だけの特権ではない。年を取ったからこそ、学べることもある」とあいさつ。「姉妹協会の独日協会ボンは、植樹などを行っ

て二十周年を祝った。その木が枝を大きく広げていくように、交流の輪もひろげていきたい」と述べた。

また、ボンでのホームステイから帰った三年生塩見幸子さんの報告もあり、会員らは国際交流の意義を再認識していた。

同協会は七年前、ドイツの文化や生活に関心をもつ県民が集まり結成。現在は学生三十人を含む約二百五十人の会員がドイツ語や音楽などの情報交換をしている。連絡は香川日独協会事務局(電話番号0878-0822)まで。



得意のドイツ語で、ボン滞在の日々を話す塩見さん

「二人の日記から」

Den 28. Apr. (Sontag) 1996

Bonn ☁ Ahrtal ☁

今朝 9 : 00 ごろシュレックさんの自動車に乗り、メンヒさんの家に行くと、中村さん等 8 人ぐらい人が集まっており、皆で自動車に乗って、ピクニックに行きました。

まず最初にアールヴァイラーに行きました。町を散歩していたら、ベートーヴェンが 11 歳の時に演奏したという家や、壁にワインを造る過程を描いてある家等がありました。⑩ (インフォメーション) が開いていたので、中に入って絵葉書や地図等を買いました。⑪ のお婆さんは北九州に行ったことがあると笑顔で話してくれました。

昼食は、15 世紀に建てられたというレストランで食べました。内装が凝っていて素敵なレストランでした。シュニッツェルにボンフリとサラダのついたキンドーメニューと林檎ジュースを注文しました。ドイツでシュニッツェルを食べるのは 5 年ぶりだったので、感激してしまいました。

その後、マイショスに行って、ワイン畑を見ました。坂を登り降りするとき、道に保温用の薄っぺらい石が重ねて敷き詰めてあって滑るので怖かったです。

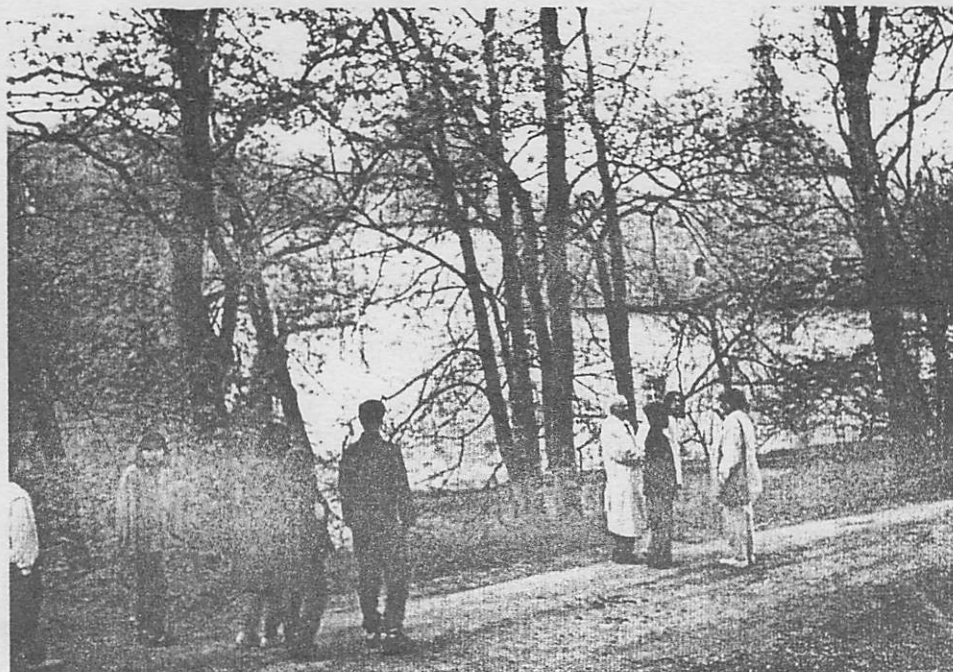
次に、ワインの醸造所に行きました。たくさんのワインの樽が置いてありました。機械だと 1 時間で 2000 本ぐらいの瓶にワインを入れられるのだ、という案内の人の話には驚きました。最も古い樽は、1893 年のものでした。彫刻がしてあって、きれいな樽でした。見学が終わってから、大人はワイン、子供は葡萄ジュースを飲みました。飲んだ後のコップは記念に持ち帰ることができるので、紙で大切にくるみました。一緒にいた人たちがくれたので、全部で 8 個になりました。

それから遊園地に行きました。ロバと山羊がいて、ロバの頭をなでてやると耳を下げて気持ちよさそうにしていました。山羊にはパンをやりました。ちょっと行ったところに階段があったので上っていくと、牛のような動物が草を食べていました。

その後、お城を見に行きました。入り口の所に馬がいたのでその辺りに生えていた草をちぎってやると、手からとって美味しそうに食べていました。お城の周りには堀があって、水が入っていました。

それから、メンヒさんの家に戻って皆と別れ、シュレックさんの家に帰りました。
た。 (高 木 伸 子)

(アールタールへの遠足で帰りに立ちよった城)



コブレンツからスイスの汽車でBONNに行きました。BONNに着いて15分くらいして、シュレックさんの車に乗って家に行きました。家に着いたあと、シュレックさんの家族と一緒にレストランに行きました。そこの料理がとてもおいしかったです。BONNに着いた次の日に、独日協会の人たちとピクニックに行きました。最初にアールヴァイラーという町に行って、教会を見たり、ご飯を食べました。そのあと、マイショースというところに行って葡萄畑を見ました。記念に葡萄山の石を持って帰りました。ワインの醸造所に行ってワインの樽を見ました。そこを出る前に中で葡萄ジュースを飲みました。そのあと遊園地に行って山羊にパンをあげてからみんなで一休みしました。僕はココアを飲みました。そのあとお城に行きました。中に入る途中、馬に草を食べさせました。水の上に浮かぶお城を見てから帰りました。帰ってから、晩御飯は鶏の肉や兎の肉が出ました。次の日、日本庭園に行って独日協会の植樹祭をしたあと、議員会館に行って29階まで上がり、お昼御飯を食べました。そのあとシュレックさんと一緒にベートーヴェンハウスに行きました。大きなポスターを買ってもらいました。家に帰ってからは、お母さんたちが帰ってくるまで、のんちゃんとシュレックさんの子供たちと留守番しました。晩御飯がすんでから、カイ君がドラエモンの漫画を持ってきてくれました。16巻、43巻、44巻の三冊でした。(高 木 悠 平)

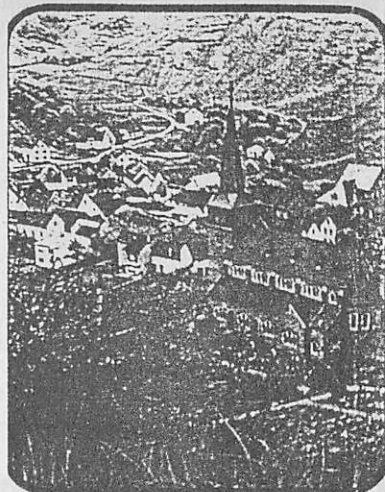
(注) 高木先生のお子さん達の「日記」からの抜粋だそうです(編集担当)。



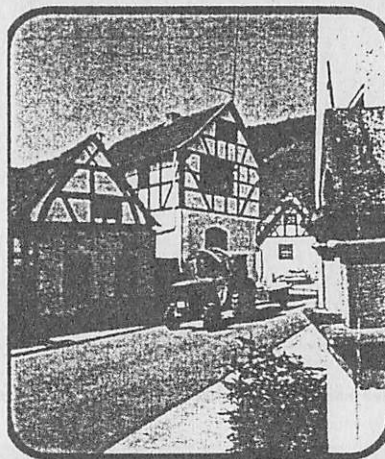
ROMANTISCHER WEINORT

Mayschoß

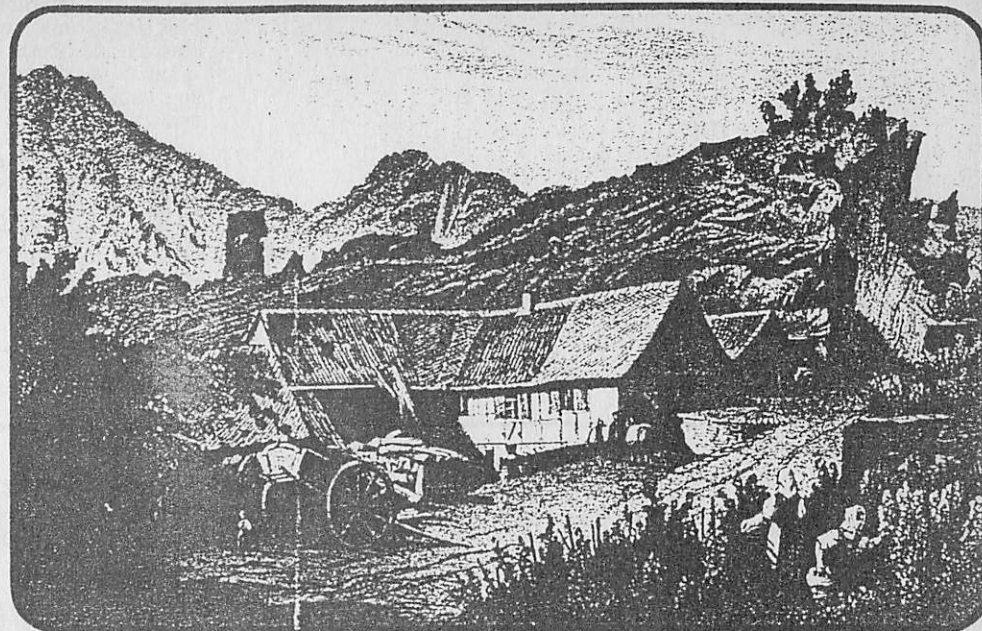
AUSGANGSPUNKT
ZUM SCHÖNSTEN TEIL DES
ROTWEINWANDERWEGES



Die alte Pfarrkirche im Oberdorf



Fachwerkwinkel im Ortskern



Ansicht der Lochmühle um 1840

AUSFLUGSORT MAYSCHOSS

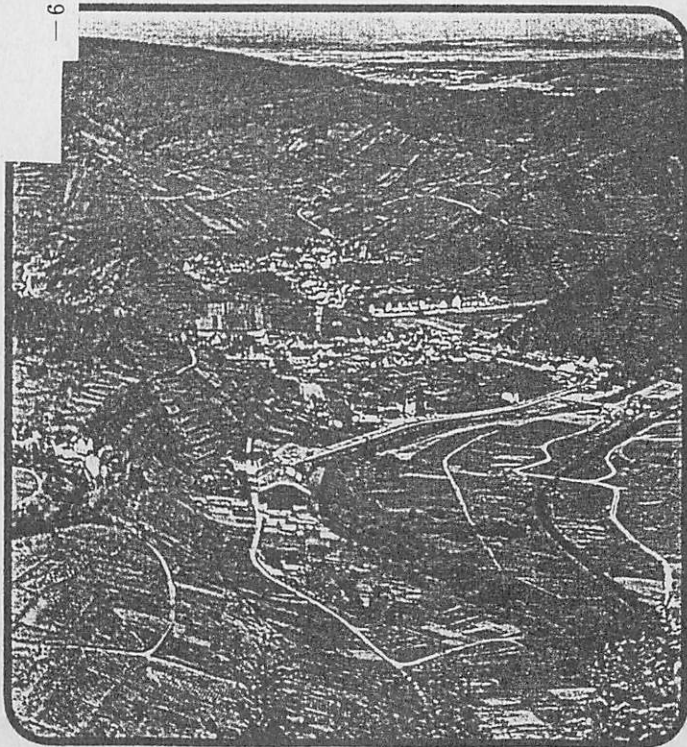
HIER HAT DIE GASTFREUNDSCHAFT TRADITION

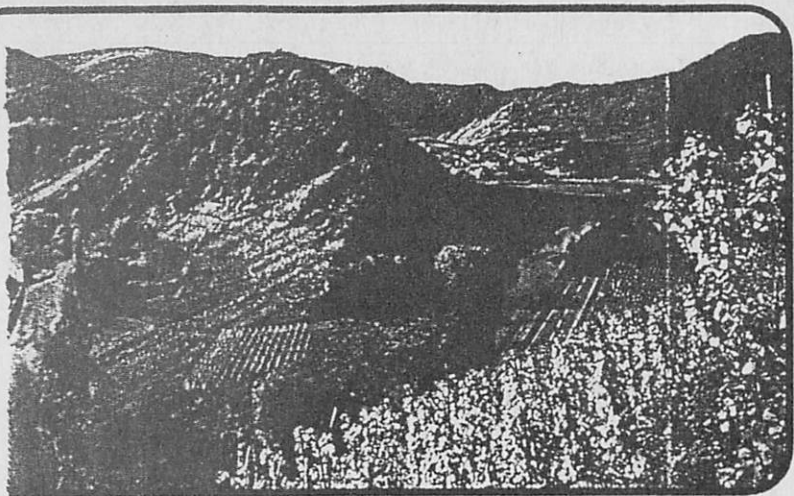
Situated in the centre of the romantic Ahr-valley and closely surrounded by steep vineyards, Mayschoß is a place worth seeing which meets all sorts of requirements:

PLACE OF RELAXATION for those who want to have a break in an especially mild and healthy low mountain range climate;
HOLIDAY RESORT for those who like hiking in a scenery which is particularly delightful. They will find here, among other walks, the most beautiful part of the Red-Wine-Walk (total length: 35 km) with its typical vantage points such as Schrock, Ümerich, Saint Michael's Chapel and Mönchberg with the „Acropolis“. The proximity of the health resort Bad Neuenahr-Ahrweiler providing indoor and open-air swimming pools, various sports facilities and the famous casino, enables them to make their holiday as varied as possible;
WINE-GROWING-VILLAGE with the oldest wine-growers' co-operative of Germany and its old wine-cellar, where, due to a guided tour and a professionally commented wine-tasting, many a lover of wine has become a wine connoisseur; last but not least A PLACE

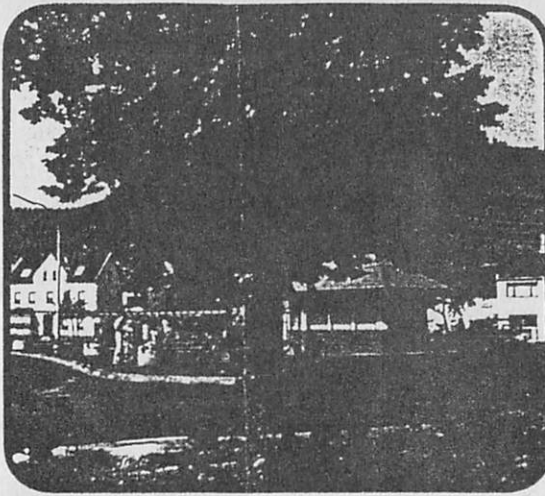
TO GO FOR AN OUTING with a group, an association or a circle of friends who want to forget their daily worries while dancing or sitting together over a friendly bottle of wine. Every day guided tours of our cellars, wine-tastings as well as lots of cosy taverns give you the chance to do the same. Those who are interested in history may visit the ruins of Saffenburg Castle and our old parish church. Here you can see the marble monument of the Countess Katharina von der Marck, female ruler of Saffenburg, dating back to 1645. You will find as well a beautifully carved pulpit and a Communion rail from 1700 and a baptismal font going back to the 16th century. Whether on an outing or on holiday, you will always be in good keeping in Mayschoß.

To accommodate our visitors we have more than 500 beds of all categories at disposal and various restaurants guarantee an excellent cuisine, sophisticated meals or good home cooking, just as you like. When can we welcome you here in Mayschoß?

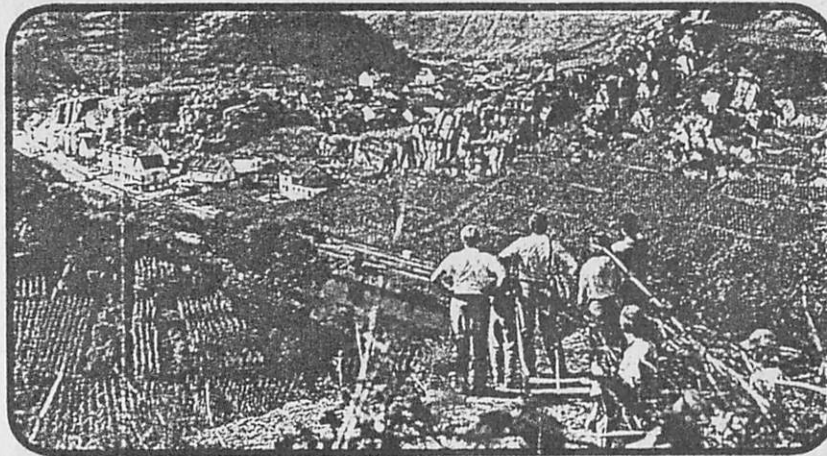




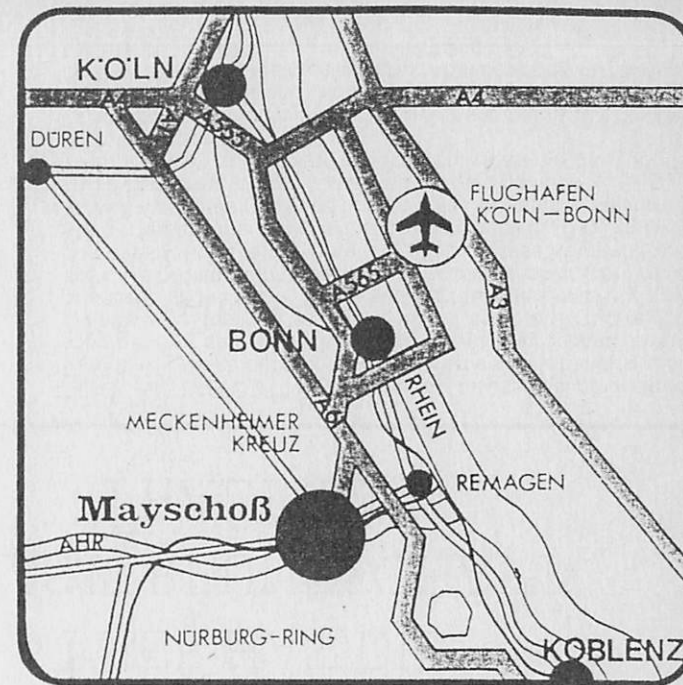
Die Ahrschleife bei Mayschoß



Der Dorfplatz mit Weinbrunnen



Blick vom Rotweinwanderweg auf den Ort



Ausführliche Informationen erhalten Sie durch den
Verkehrsverein Mayschoß e.V.
Postfach · 5481 Mayschoß · Telefon (02643) 8308

Herausgeber: Verkehrsverein Mayschoß e.V.
Fotos: Kreisbildstelle, W. Kirsch, Cornely-Verlag, Schäfer
Konzept und Gestaltung: Michael Henneberger, Reifferscheid
Fotosatz: Herbrand & Friedrich, 5488 Adenau

Überreicht durch:

ERHOLUNGSSORT MAYSSCHOS — 10 — MILDES KLIMA IN WILD- ROMANTISCHER LANDSCHAFT

itué au centre de la vallée romantique de l'Ahr et étroitement entouré de vignobles raides, Mayschoß est un endroit qui satisfait aux désirs les plus divers:

UN LIEU DE REPOS pour ceux qui, dans un climat extrêmement doux et agréable, veulent se détendre;

UN LIEU DE VACANCES pour ceux qui aiment parcourir à pied un paysage pittoresque où la nature est encore intacte. C'est ici qu'ils vont, entre autres sentiers pédestres, la partie la plus belle du massif du Vin Rouge (longueur totale: 35 km) avec ses points de repère très connus tels que Schrock, Ümerich, la Chapelle de Saint Michel et Mönchberg avec l'„Acropole". La proximité immédiate de la station d'eaux Bad Neuenahr-Ahrweiler avec ses piscines couvertes et ses divers terrains de sport et son casino célèbre leur permet d'organiser ses vacances de façon variée;

UN LIEU VITICOLE avec la coopérative vinicole la plus ancienne d'Allemagne et de vieilles caves où, lors d'une visite guidée et une dégustation de vins commentée par des hommes du métier, maints amateurs de vin sont devenus connaisseurs;

LIEU D'EXCURSION finalement pour des groupes, des clubs ou des cercles d'amis qui veulent oublier leurs soucis quotidiens en dansant et en goûtant nos vins. Chaque jour, des visites guidées de nos caves et des dégustations de vins ainsi que de nombreuses tavernes sympathiques vous y invitent. Ceux qui s'intéressent à l'histoire peuvent découvrir maintes choses intéressantes, par exemple en visitant les ruines du Château de Saffenburg ou notre église paroissiale très ancienne. C'est ici que se trouve le tombeau de marbre noir de la Comtesse Katharina von der Marck, maîtresse de la Saffenburg, qui date de 1645. De plus, on peut y voir une chaire sculptée sur bois et une table de communion de 1700 ainsi que des fonts baptismaux de trachyte datant du 16^e siècle.

Soit à l'occasion d'une excursion, soit pendant vos vacances, vous serez toujours à l'aise chez nous. Pour vous loger, nous tenons plus de 500 lits de toutes les catégories à votre disposition et de nombreux restaurants excellents garantissent une bonne cuisine, fine ou bourgeoise, selon votre goût. Quand pourrions-nous vous souhaiter la bienvenue à Mayschoß? On vous y attend.

「Bonnで授かった宝物」

中 村 敏 子

Bonn独日協会20周年記念のセレモニーが終り、となりの部屋では、にぎやかにシャンパンがぬかれ人の熱気でむせ返り、Bonn大学の荘厳な装飾のあるクラシックなホールは、和気あいあい笑声があふれていた。

現地 TADANO FAUNの社長井上駿介氏も「私達の毎日は、パチパチ音のするような真剣勝負の連続ですが、こんな優雅で心なごむ会は、久方ぶりです。」とするどい眼光が、大変やわらいでおられるようにお見受けした。

ひかえの間に、ほっと腰をおろし日本大使館の人たちと、たわいない話をかわしている、私と同年輩の日本人のご夫人が、近づいてこられた。

「あなたに是非お読みいただきたい本がありますの。ケルンの佐々木と申します。」ケルン郊外に10年近くも住んでおられる日本人牧師の奥様とのこと。2、3日前、Schmidt・陽子さんから「印象深い本よ、日本に帰られたら是非に」とすすめられたばかりの本・『ズザンナさんの架けた橋』のことだとおっしゃる。

ズザンナ・ツァヘルトさんが、日本とドイツで生きてこられた87年という長い道のりを、根気よくテープをまわしながら聞きため、稿をおこし、雪山香代子さん（すでに帰国されている）とともに補足、再稿をくり返し、やっと2月に上梓されたこの本の共著者、佐々木五律子さんその人であった。佐々木さんは、多くを語らず、しずかに立ち去られた。

Bonn独日協会から送られてくる役員名簿の中に、ただ1人の名誉会員Susanna・Zachertとして、そして、この方の亡くなられたご主人（prof. Dr Herbert Zachert: Bonn大学に日本学科を創設された）が、初代の会長であられたということも承知していた。

この度、私が泊りこんでいろいろとお世話になった Mönch 宅に、前夜、ズザンナさんからお祝いのメッセージがとどいていたのを思い出した。

娘婿でベルリン・フィルのチェロ奏者ルドルフさんの定年最終演奏旅行にロシア（サンクトペテルブルグ）へ一緒に出かけられた由で、このお祝いの会にはあいにく、欠席ときかされていた。

Zachert氏は、昭和8年に旧制松本高等学校のドイツ語教師として、新妻ズザンナさんを伴ってふ任し、戦後こんらの最中、家族とともにドイツへ帰還された――。

ただ、これだけを、予備知識として Mönch さんからおそわり、先入観をなるべく少くして、本を開きたいと願った。

×

×

×

「まるで、お花の使者ですね」と声をかけられたほどに、花という花が一せいに咲きそ

ろいドイツの春・4月は、美しかった。もう少しこちらで、という思いもあったが、あの本が読めるという秘密の宝物を得たような気持ちで、帰ってきた。注文した本は、一週間もかかって手もとにとどいたが、一息で読んでしまった。

「日本とドイツ・私の87年」という副題のとおり、日本と、ドイツの現代史をそのままに重ねあわせるような、人間史がある。ズザンナさんは、それをこともなげにふり返っている。

「考えてみると、私はずいぶんさまざまな時代を、さまざまな場所で生きてきたものですが、この年になるまで、自分が過ぎて来た道をゆっくりふり返ることはありませんでした。いつも明日に向けて、そのとき自分にできる一番よいことをしようと努めてきたように思います。長い人生で大切なのは、何にでも取り組んでみる好奇心と、ものごとをありのままに受け入れる心のやわらかさではないでしょうか。」

私の友人に何と評し、何と説明して、この本を読んでいたかどうかと考え、考えた。結局、「こういう方が、いるのよ。とにかく読んでほしいの。」となった。読者各々が、各々に感じとりひびき合えばよいのではないかと。

Zachert氏は、1972年に勲三等瑞宝章を授かり、ズザンナさんは、数年まえ勲五等宝冠章をいただいている。その時の気持ちを伝えるこんな一文がある。

「家庭の主婦でありつづけた私のささやかな働きが、私の祖国——日本とドイツを結ぶために少しでも役に立ったかと思うと、こんなにうれしいことはありません。そして、どんな勲章にもまさるすばらしい友情を、これほどたくさん与えてくれた人生に感謝せずにはいられません。

ふり返れば、夫と三人の子ども、八人の孫と曾孫たちとの生活、そして、私達一家に世代を超えてあふれるご好意を寄せて下さった日本のお友だちから元気をいただいて、私の人生は本当に充実していました。これからも、元気のあるかぎり、日本とドイツの小さな架け橋として働き続けたいと、私の心は今なお熱く燃えています。」

この頃私は、まるで母親に電話をするようにケルンのズザンナさんの声をききたくなる時がある。はりのある声で、流れるような上品な日本語に私の方が、ことばにつまってしまう。「今年は米寿のお祝いですわね」と問いかけると、「私は、そうとは思いたくないのだけれど、体は年をとっているのでしょうかしら。又、お電話下さいませ。Auf Wiedersehen!」

そして、この稿のおわりに要をえたコラム「窓」を添え、雪山さんのせつせつと、訴えるあとがきの一部を引いて私のおもいとさせていただきます。

窓

論説家・作家から

「古きよき時代」というが、現実には、結構すくめの時代など、あったためしはあるまい。ただ、懸命に生きた人には、あとで振り返ると、苦勞の数々もよき思い出として輝く。

『ズザンナさんの架けた橋』（集英社）という本で、そう思った。

ドイツに住むズザンナ・ツァヘルトさん（ハ）が生涯を振り返る。出来ごとの多くが私たちの過去と重なる。

ソウルに近い港町・仁川で生まれた。父はドイツ人。

貿易商、母は長崎で育った日本人。六歳のときに起きた第一次世界大戦では、父母それぞれの国が互いに敵として戦った。

女子大生が珍しかったころ、ハンブルク大学日本学科に学んで、同級生と結婚する。夫の故ツァヘルト教授は、後にボン大学に日本学科を開設した。

新婚間もなく、旧制松本高校の先生となった夫と来

日する。そこまでは楽しかったが、今度は第二次大戦が始まる。

疎開先に指定された軽井沢の冬にまきがなく、山から引く水も凍った。二人の子供が小児マヒにかかる。帰国してからも収容所に入れられた。夫の母がいたベルリンにしばらくいて、ボンに越そうという矢先、後に長く東西を分断する壁の構築が始まった。

現代史の年表をたどるような激動の人生である。それをズザンナさんは穏やかに語る。

松本で生まれた長男のハンスさんはこの三月まで、連邦警察庁の長官を務めた。退任のあいさつで、市民にこう訴えた。

「個人主義が行き過ぎで、社会がばらばらになった。犯罪の捜査にも難しい時代だ」

統一の喜びもつかのまです、ドイツ社会は大量の失業や犯罪の増加に苦しんでいる。

いつの世も楽ではない。それでも、今をしっかりと生きる人が、あとで「古きよき時代」をなつかしむのである。

（見）

（1996.5.30 朝日新聞）

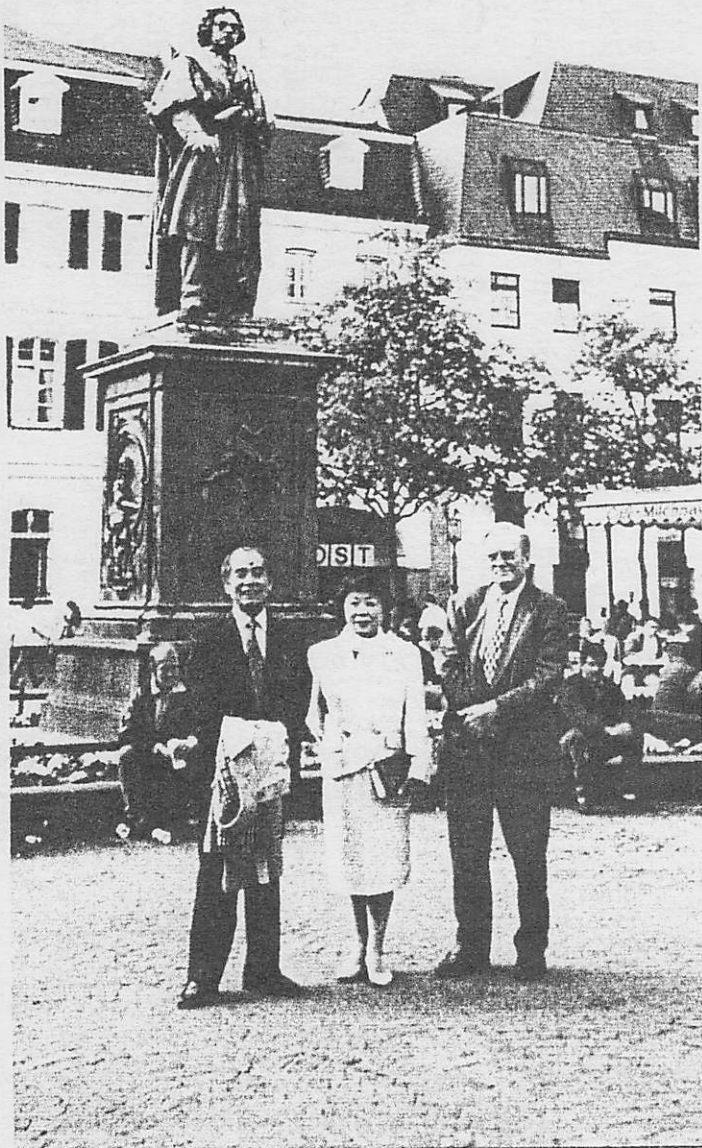
ベルリンの壁が崩壊して世界が喜びにわいたのはわずか六年前のことなのに、時代はまた大きく変わろうとしている。戦後五十年を経て、今なお戦火の絶えぬ世界の亀裂を埋めるものは、結局はズザンナさんのようにささやかではあっても確かな人間の存在と、無数の個人の国境を超えたあたたかい結びつきなのではないかと思いつつ――。

一九九六年二月

雪山香代子

〔紹介書籍〕 「ズザンナさんの架けた橋」 集英社

著者、ズザンナ・ツァヘルト、雪山香代子、佐々木五律子



ボン「ミュンスター広場にある

ベートーベン像の前で」

左より 井上 駿介氏

中村

Dieter Mönch氏

香川日独協会「フェスティバル[第九]」を後援

1996年11月10日(日)、香川県県民ホールで開催されました「香川芸術フェスティバル'96」の閉幕公演「フェスティバル[第九]」の演奏会(ベートーヴェン交響曲第9番二短調作品125〈合唱付〉)を在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館と香川日独協会が後援いたしました。

今回の演奏会は、10年目という節目の年に当たり、これを記念してドイツから指揮者とソリスト4名をお招きして催されることとなり、このことから在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館と香川日独協会とが後援することとなったものです。

お招きをした指揮者は、ラインハルト・ザイフリート氏。ソリストの方々は、ソプラノがソニア・パスカーレさん、アルトがコルネリア・サンダーさん、テノールがギュンター・ノイベルト氏、バリトンがペーター・シューラー氏です。

また、神戸からは、ドイツ連邦共和国総領事館のクラウス・フィーツェ領事とご一家も来高されました。

演奏会終了後、「芸術フェスティバル第九」実行委員会と「フェスティバル第九交流会」実行委員会とがチャーターした「御座船」で瀬戸内海を周遊しながらドイツからのお客さま達を囲んで、2時間余り、船内で楽しく交流がはかられました。

フィーツェ領事ご一家、細川会長をはじめとする香川日独協会会員10数名もこの交流会に参加しました。(藤本記)。



(公演終了後、県民ホールのロビーで)

客席も巻き込んだ2000人を超える大合唱団が歓喜の声を上げた第九演奏会―県民ホール



香川芸術フェスティバル'96

「歓喜の歌」2千人 フィナーレを飾る

称賛相次ぐ「第九演奏会」

新聞社など主催）は、十日の「フェスティバル第九演奏会」で閉幕した。今年も二千人の大合唱が香川の芸術の秋を締めくくった。（26面に関連記事）

「交流と創造」をテーマに、十六日間の会期で行われた「香川芸術フェスティバル'96」（県芸術祭運営委、県教委、四国

県民ホールで開かれた。オーケストラや合唱団の特徴をとらえたラインハルト・ザイフリート氏の指揮は、駆けつけた約千五百人の第九ファンを酔わせた。合唱団は、県外からの参加者を含め五百八十人。客席も巻き込んだ二千人を超える「歓喜の歌」が会場いっぱいに響きわたると演奏会は最高潮。拍手と歓声が鳴りやまない客席から、「次の機会にはぜひ合唱団に加わりたい」など、称賛の声が続いた。

(1996. 11. 12付 四国新聞)

指揮 ラインハルト・ザイフリート



フライジング生まれ。若くしてピアニストとしての才能を現したが、早くからオーケストラ、歌唱、オペラ、そして指揮への興味を強く感じていた。

ミュンヘン音楽大学でピアノと指揮のマスターコースを最高の成績で修了。その後、シエナのフランコ・フェラーラのもとで研究を続けた。

プロとしての経歴を数カ所のオペラのコレペティートル(下稿古のコーチ)から始めた(最後はマンハイム国立劇場)。1977年にはミュンヘンのゲルトナー・プラッツ国立劇場に招かれ、1980年まで首席指揮者を務めた。

ルドルフ・ケンペやレナード・バーンスタインと演奏旅行した助手の時代に、ザイフリートは音楽に関して決定的な刺激を受け、基礎的なレパートリーを得た。ラファエル・クーベリック、カール・リヒターとの仕事も印象深い。リヒターには今日もなおパッサの偉大な合唱の理解のために特別な尊敬を払っている。

ドイツ国内外の多くのオーケストラでフリーの

指揮者として活躍してきた。バイエルン放送交響楽団、カッセル国立劇場交響楽団、ゲラー・フィルハーモニー、ザールラント国立交響楽団、ブラウンシュヴァイク国立オーケストラ、ニュルンベルク・フィルハーモニー、レーゲンスブルク・フィルハーモニー、リュブリアナ放送交響楽団、スロバキア国立フィルハーモニー、アイルランド国立シンフォニーなどである。

ラベル「オルフェウス」を手始めに、スメタナ「我が祖国」、ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第5番」、チャイコフスキー「ピアノ協奏曲第1番」などをレコーディング。現在、アイルランド国立シンフォニー・オーケストラとメンゼルスゾーン5つの交響曲のレコーディングと取り組んでおり、そのうち、第1番と第5番は発売されている。

1991年夏から1993年秋までレムシャイト交響楽団の音楽監督を務めた後、1993年からドイツ北部、ブレーメン近くのオルデンブルグ国立劇場の音楽監督の要職にある。

ソリスト

ソプラノ

ソニア パスカーレ



アウクスブルク生まれ。ミュンヘン音楽大学で声楽を学んだ後、ドイツ国内外でオペラ歌手やコンサート歌手として活躍。リリカルでドラマチックなコロラトゥーラ歌唱には定評がある。

オペラでは、マンハイム国立オペラ、ダルムシュタット国立オペラ、ライプチヒ・オペラ、フランクフルト・オペラ、ドルトムント・オペラなどで客演。モーツァルト「魔笛」の夜の女王、R・シュトラウス「ナクソス島のアリアドネ」のツェルピネッタなどの役を好んで演じている。

マインツのZDF(ドイツ第二テレビ)、ミュンヘンのバイエルン放送局、ケルンのWDR(西部ドイツ放送)、ベルリンのSFB(自由ベルリン放送)、パリのラジオ・フランスなどにも出演。オーケストラとの共演も多い。

ヘッセル州コンクール(ウィーン)、連邦声楽コンクール(ベルリン)で優勝。ヴァルター・カミンスキー特別賞や若い芸術家のためのバイエルン州の奨励賞も受賞している。現代音楽の専門家でもある。

アルト

コルネリア サンダー



ジーゲン生まれ。ケルン音楽大学でクレシー・ケリー＝モーグに学ぶ。卒業後、パイロイトでアンナ・レイノルズとともに活動に入る。

クルト・ヴィトマー、ユリア・ハマリのマスターコースにも参加。ヘルムート・リリングによるシュトゥットガルトの国際パッサ・アカデミーでも共演した。シュヴェツィゲンのモーツァルト音楽祭をはじめ、各地で活発な演奏活動を行っている。

テノール

ギュンター ノイベルト



ディーブホルツ生まれ。ヒルデガルト・ヤハノフとともにブレーメンで声楽を専攻。スイスのザンクト・ガレンのオペラハウスでオペラデビューの後、ドイツ、ベルギー、オーストリア、スイスなどのオペラ劇場の舞台を踏んだ。特にミュンヘン、ウィーン、ベルリンの国立オペラ劇場で数多くの客演を行っている。1974年、ニュルンベルクのオペラの常任メンバーとなった。続いて、人気テレビ番組「このメロディーが分かります」に出演。さらにさらにコンサート出演やラジオ録音も行った。

リリカル・テナーとして、オペラやオペレッタ、およびミュージカルの専門分野のあらゆるパートを歌っているが、特にモーツァルト「魔笛」のタミーノ、チャイコフスキー「エウゲニー・オネーギン」のレンスキー、シュトラウス「こうもり」のアイゼンシュタインなどの役柄を好演。プリテン「ベニスに死す」のアッセンバツハ役では偉大なオペラ歌手であることを示し、経歴の頂点に達した。現在はドラマチックな役、R・シュトラウス「サロメ」のヘロデス、シェーンベルク「モーゼとアロン」のアロンなど多数の主要人物を演じている。

バリトン

ペーター シューラー



ヴィースバーデン生まれ。フランクフルト芸術大学で音楽教育を学ぶがたわら、フランクフルト大学で神学も勉強する。1978年から声学の勉強を始め、マルティン・グリュントラー、ユリア・ハマリ、ジーン・コックス、アンナ・レイノルズらに師事した。

1990、94、95年にはシュヴェツィゲン音楽祭にソリストとして出演。1991～95年のケーニヒスルター音楽祭、1992～93年のハイデンハイム音楽祭に参加した。

初期バロックから近代音楽に至るまで幅広いレパートリーを持つ。特にパッサの作品、ヴェルディの「レクイエム」、メンデルスゾーンの「エリア」、ハイドンの「天地創造」では定評がある。ドイツ国外ではアメリカ、ルーマニア、イスラエル、フランス、オーストリア、ベルギー、オランダ、スイスで演奏。リートも得意とする。

テレビ、ラジオ出演の他、CDの録音もある。

フェスティバル[第九]

▲香川芸術フェスティバル'96
閉幕公演

芸術文化振興基金助成事業 ▲
第11回国民文化祭協賛事業

ベートーヴェン交響曲第9番ニ短調作品125〈合唱付〉

Beethoven Symphony No.9 in D minor op.125 "Choral"

O Freunde, nicht diese Töne, sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere.

親友よ この調をやめて、いざともに声を合わせて歌おうではないか。歓喜に満ちた歌を……L.v. Beethoven

テーマ「交流と創造」



96年11月10日 日 14時開演
香川県県民ホール

■主催／「香川芸術フェスティバル第九」実行委員会

香川県芸術祭運営委員会、香川県

香川県教育委員会、高松市教育委員会

財団法人置県百年記念香川県芸術文化振興財団

四国新聞社、瀬戸内海放送、西日本放送

全日本「第九を歌う会」連合会

■協賛／朝日新聞高松支局、NHK高松放送局、岡山放送

産経新聞社高松支局、山陽新聞社、山陽放送

毎日新聞高松支局、読売新聞高松総局

■後援／大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、香川日独協会

■協力／香川芸術フェスティバルを成功させる会 (KAFLOT)

近況「このままでいいのか？ 私達の社会は！」を考えてみますと・・・

報告者

香川県丸亀市川西町北669

笠井 強

先頃、ドイツ連邦共和国の総領事館・領事のクラウス・フィーツェ氏をお招きし、介護制度のしくみについて講演頂きました。今、まさに日本が公的介護保険制度の確立を目指してドイツ型制度をモデルに研究中で、非常に意義あるお話でした。来るべく高齢化社会にそなえる為ですが、考えてみますと、日本も昭和39年の東京オリンピック開催以降、高度成長し先進国の仲間入りをしました。今では経済発展世界1位と言われるまでになりました。しかし発展の反面では住専問題、エイズ問題、そして旧国鉄未処理問題など様々な問題も生じました。そして、国債赤字も240兆円余りで、今後、介護制度をどのようにして行くかは大変でしょうけれど、早急に、各分野での研究、意見集約を急がなければなりません。



(講演中のフィーツェ氏)



(講演後フィーツェ氏を囲んで)

♣ ボランティアの意義

昨年の阪神大震災以来、ボランティア活動がマスコミから注目されているが、大事なことはボランティアに携わる一人一人の心掛けだと思います。多くの日本人の意識の中には、メンツとか体裁にこだわり、ボランティアの本来の意味を履き違えている人が少なくない。元来ボランティアとは友達や親しい仲間作りの精神的表現であり、けっして建前やエエカッコだけで長く出来るものではない。人間という文字が人の間と書くように、支えあう心のコミュニケーションの時代になって来たとも言えるのではないのでしょうか。

現代の子供たちは、塾通いや家の中でファミコンゲームに興じることが流行になり、隣近所の子供どうしで相撲やチャンバラ遊びをする機会もなくなり、その結果、相手の痛みとか苦しみを感じられない人間になって、殆どゲーム感覚で平気に人殺しをしてしまう若者が増えています。だからこそ、これからの若い世代に人を思いやる心の大切さ、人を慈しむ心の大事さを訴えて行きたい。それは、身体障害者や健常者に関係なく、全ての立場において、平等であると共にボランティア活動に携わる人達の意識の変革がやがて争いのない社会を造っていくのだと思います。たとえ、身体が不自由でも、自分の出来る能力で身体の元気な人に何か役に立ちたいという気持ち、この両方の心がガッチリとかみ合った時に本当の友情が芽生えて大樹の様に根を深く広く張っていくならば、苦楽をともにして末永く付き合っていける友達が『ボランティア本来の姿』であると信じています。

去る、8月4日、高松市民会館にて『わたぼうしコンサート』に私の友人が詩を応募しましたところ採用となり、ボランティアの方2人と応援に行きました。その応募した詩に曲がつき歌い手の方により熱唱され、アンコールの拍手がありました。私も非常にうれしく感動しました。友人は今、施設園で車椅子の生活をしていますが、自立を目指して一つ一つ努力をしています。‘頑張れ。’です。なぜ、この話を出したかと言いますと世間ではまだボランティアは大変だと思っている人が多いように思われますが、決してそうでは無く障害を持っている人やお年寄りの方にも家族や友達と思って接して欲しいと願うからです。これからの世の中、介護は身近な友達・家族に「私に出来る力添えを」して行きたいものです。そしてこのような社会に介護心が目ばえ、国民一人一人が“ボランティア心”を持ち大きな輪となり、『安心出来る福祉国家』になるのではないかと思います。そして「感動ある人生は人にやさしく、自分に正直に」、ではないのでしょうか。

尚、私の友人（尾野勝さん）の詩とコメントをご紹介します。

みんなで笑顔の楽しい輪を！！ おわり。

園生ブルース

作詞／尾野 勝

作曲／三好 伸二

窓から風景（けしき）を眺めていても

不自由な身体で行けはしない

だけど俺達 心は動く

夢もみたけりゃ景色もみたい

身体が悪い

病気が悪い

だけど ガンバル希望を捨てずに

願いが叶えば 園生ブルース



好きな姉ちゃんいたとしても

態度にならなきゃ口説けはしない

だから俺達 いつも片思い

恋もしたけりゃデートもしたい

※ { 勇気が出ない
言葉が出ない
だから 綺麗な気持ちでいたい
思いが通じりゃ 園生ブルース

※ 繰り返し

思いが通じりゃ 園生ブルース

プロフィール

尾野 勝

昭和27年9月6日生まれ、43歳。

重度の脳性小児マヒで、小さい頃は寝返りさえできずに死ぬことばかり考えていました。

母親が国語の教師だったので文章をつくるのに興味を持ち自分の心を、もっと表現したくて詩や絵をかきはじめました。

現在は、坂出市の瀬戸療護園で生活しています。今は心身ともに元気です。



・みんなで笑顔の楽しい輪を !!

おわり。

環境とくらしへの心くばり

—マールブルクでのくらしの体験から—

中山 充

はじめに

私は、文部省の在外研究制度のおかげで、1994年の3月末から12月末まで9カ月間、ドイツのマールブルク大学で民法、環境法などを研究いたしました。妻、子供2人との一家4人で、マールブルク郊外の丘の中腹にある大学宿舍（30～40家族が入居する集合住宅）に住み、よく市の中心に一緒に出かけ、買物、散歩をして、ドイツの生活を楽しむことができました。

その経験の中から、環境問題でとりわけ印象深かったことを報告させていただきます。それはゴミ問題とバスを利用した交通対策なのですが、その前にまず、マールブルクの紹介から始めましょう。

1. マールブルク

マールブルク市は、ヘッセン州に属し、フランクフルトの北約100km、鉄道で1時間のところ、半円を描くように流れるラーン川に囲まれた丘陵にあります。丘の上には13～16世紀に建てられた城が、麓には13～14世紀に建てられたドイツ最古のゴシック様式の教会の一つであるエリーザベト教会がそびえ立っています。この歴史的な建物の間の、緩やかな斜面に、あるいは急勾配の坂道に、古い木骨組の家がその美しさを競い合うように軒を並べています。細い石畳の通りの奥では、上に行くほどせりだした木骨組の家の窓が路地をはさんで互いに道を狭め合っています。かつてグリム兄弟がザビニー教授のもとで歴史法学を学び、ブレンターノやアルニムなど、ロマン派の人々との文学的な交わりによって、はじめてメルヘンの世界へと目を開かされた町です。

この町を歩いていると、まるで中世をよみがえらせた祭りの中に引き込まれて行くようです。それにもかかわらず、若者の息吹きも強く感じられます。それは、この町が、単に中世の姿をとどめているだけではなく、同時に由緒ある大学の町でもあるからです。ハイデルベルク、チュービンゲン、ゲティンゲンとともに、ドイツの4大大学都市の一つといわれています。

人口は、7万9千人です。高松市の約25%で、丸亀市より少し多いぐらいです。そのうち、学生が1万8千人、教職員が6千人以上であり、人口の約3割が大学関係者ということになります。

面積は、110km²で、高松の約60%、丸亀の1.7倍、坂出の1.2倍にあたります。その中心地区は2km²ほどの市街地・住宅地であり、市庁舎やマルクト広場がある中世以来の旧市街は、その中の500m×300mの長方形に収まる部分です。中心地区にいくつかの集落が接続し、それから少し離れて、やや小さい集落が点在しています。これらの集落の間の平地と丘陵には、畑と森林が続き、建物はほとんど建っていません。

2. ゴミ問題

ゴミの問題では、第1に、包装の減量がよく進んでいること、第2に、再利用できるゴミ、再生利用できるゴミと、一般のゴミとの分別収集がよく進んでいることが、印象的でした。

(1) 包装の簡素化

まず、包装が簡素です。買物をする時、店員から買物を入れる袋が必要かを聞かれます。布製またはビニール製の買物袋を持参している客が多いのですが、持参していない人は、買物袋をその場でもらうか、買うことになります。ビニール製の袋は、デパートや専門店では無料ですが、スーパーでは有料です。布製の袋は有料で、ビニール製の袋より高く、1マルク（約65円）だったと思います。

生鮮食料は、デパート、スーパーマーケットまたは青空市場（マルクト）で買います。買い方は、日本と余り変わりません。デパートとスーパーマーケットでは、客が入口に備えられているキャスター付の買物かごを押して店内を回り、陳列されている商品を自分でそれに入れ、出口のレジでまとめて代金を支払い、買った物はその後自分の買物袋に入れます。青空市場では、客の求めに従って、売手が代金と引換に商品を客に渡します。

それに対して、包装・容器については、かなり違います。発泡スチロール、プラスチックのトレイやパックはあまり使われません。裸のまま陳列されています。ただ、卵は再利用可能な紙製パックに入っています。野菜と果物は、デパートやスーパーでは、備え付けの買物かごに入れるとき、客が裸のまま取るか、側に備えられている小さなビニール袋に入れます。青空市場では、客が直接自分の買物袋に入れるか、売手がまとめて備え付けの紙製またはビニール製の袋に入れます。肉、ソーセージ、チーズ、魚については、デパート・スーパーでも、店員が売場にいて、客の求めにしたがって商品をビニール製の袋に入れて客に渡します。

その他の飲料の包装・容器は、紙製とビン製が多く、プラスチック製が少ない。カン製もあまり多くありません。だいたい、牛乳は紙、清涼飲料水とビールはカンまたはビン、ワインはビン、ジュースは紙、カンまたはビンです。ペットボトルが使われるのは、ミネラルウォーターや油ぐらいです。

衣類や日用雑貨は、予め包装されているものが多いのですが、包装は簡素です。買った商品をわざわざ包装することもありありません。でも、クリスマスなどのプレゼント用に包装してくれるように頼むと、応じてくれます。

(2) ゴミ収集

ゴミ収集の方法は、家庭ごとの収集、地域ステーションごとの収集、それに売主による引き取り（デポジット制度）があります。

第1に、各家庭がゴミを自宅のコンテナにいれ、それを市または収集業者が定期的に収集します。

コンテナは規格化されています。普通の家庭では、プラスチック製の縦長の

直方体で、取り外しできる蓋がついています。大きさは、縦横40cm、高さ80cmくらいだと思います。黒と青の2種類があります。集合住宅では、金属製、やや横長の円筒と直方体の中間のような形で、上部に押し開き式の蓋があり、キャスターがついています。横1m、奥行70cm、高さ1.3mくらいの大きさで、銀色、青、黄の3種類があります。収集係員がこれらのコンテナを収集車の後部に置き、機械でそれを挟み込んで持ち上げ、回転させて収集車の中にゴミを落とします。

コンテナの色分けは、中に入れるゴミを分別するためのものです。黒または銀色のコンテナに入れるゴミは、ゴミ一般です。生ゴミ、燃えるゴミのほか、プラスチック・金属のゴミ等もよいのですが、分別収集できる紙、プラスチック、ビン、カン、は、たいていここには入れません。市が収集し、焼却しないで、平野や山地に掘った穴に埋めます。

青のコンテナに入れるゴミは、新聞・雑誌類です。回収されたものは、再生紙の原料として使われます。再生紙は、封筒、ノート、トイレットペーパー、本などによく使われています。

黄のコンテナに入れるゴミは、グリュネンポイント (grüne Punkt) のマークつきの包装用の紙、プラスチック、カン、ビンです。Duales System Deutschland という収集業者が収集し、分別して、再生利用します。普通の家庭ではこのゴミ用のコンテナはなく、大きな専用の黄色いポリ袋にまとめて、特定の場所に置くようです。

その他、住民と市との間の特別の契約によって、落葉や生ゴミを市が特別に収集し、埋め立てるという方法もとられているようです。埋立地の利用が安全であるようにしよう、農業もできるようにしようという趣旨です。

第2に、地域ステーションごとの収集ですが、一定範囲の地域ごとに作られたコンテナに、各人が随時捨てに行き、それを収集業者が定期的に収集します。この方法で、ビンとカンが収集されます。

コンテナは、金属性で半球状、高さ1.5mくらいです。上部に近いところに10～15cm位の穴があり、そこからビンまたはカンを投入します。白ビン用、茶色ビンと緑ビン用、カン用の3種類があります。茶色ビンと緑ビン用は、左右を分ける仕切りが中にあり、それぞれの投入口がついています。これらは収集業者が収集し、再生利用します。

最後に、売主による引き取り (デポジット制度) です。

飲物の容器である特定のペットボトル又はビンは、その容器入り飲物を買った店に、客が自分で持って行って返還し、引換に1本につき50プフェニヒ (33円) のお金をもらうことができます。そのお金は、予め預託金として飲物の代金に上乗せしていたものであり、それを返してもらうという仕組みです。

スーパーマーケットでは、その容器を引き取った係員が、返還する預託金額を書いたレシートを渡してくれます。他の買物の代金をレジで支払うときにレシートを渡すと、買物の代金額からその金額を差し引いてくれます。預託金の割合が高いためか、この制度を利用する人はかなり多いように思いました。

(3) 法制度

以上の包装の簡素化とゴミ収集を支える法制度—1986年の廃棄物法について、少し説明いたします。

この法律は、ゴミの抑制と再利用をゴミの埋立、焼却よりも優先させ、それを達成するために、包装と容器について事業者に表示義務、処理軽減義務、取戻・預託金（デポジット）義務、分別処理義務を負わせる命令を、連邦政府が出すことができることとしています。

政府は、実際に、飲料物（清涼飲料水、ビール、ワイン）容器と洗剤容器について、デポジット制を定めました（預託金は、容量によって0.5マルク、1マルク、（洗剤のみ）2マルク）。このため、小売店の人手や経費がかさみ、業界が店頭からペットボトルを追放しました。政府は、また、包装について、製造者と販売者に使用後にそれを回収し再利用する義務を負わせました。

ただ、回収の手間の増大を恐れる小売業界との妥協から、販売用包装の回収義務と飲料物容器・洗剤容器のデポジット制を免除する目的でデュアル・システム（二重システム）を作ることと認めました。これは、公的なゴミ処理制度とは別に、製造・流通業者が自前で住宅の近くに回収箱を設置し、回収した物をリサイクルする制度です。この自主回収の対象になるのは、グリュエネプункトのついた容器と包装です。消費者がこれを回収箱に投げ込み、製造・流通・小売業界から委託された処理業者（今は Duale System Deutschland 1 社のみ）がそれを定期的に回収し、ガラス、紙、ボール箱、プラスチック、その他に分別して、再使用、再利用するのです。処理業者の運営費用は、製造業者などがグリュエネプункトの使用料として、容器・包装の容量別に1個当たり1～20プフェニヒ（0.7～13円）を支払うことで賄われます。

デュアル・システムは、新しい制度として注目されていますが、環境保全の観点からは、使い捨て社会を支える生産消費構造を変えることなく、ゴミの抑制という問題の根本的な解決にならないという批判があります。環境に優しい製品を開発する努力が衰え、消費者がゴミの行方に関心を失うことなどが心配されています。

1986年の廃棄物法は、廃棄物の発生を抑制する措置が十分ではありませんでした。国内の処理施設が不足しているために、輸出量が増大している廃棄物さえあります。この事態を抜本的に解決するために、1994年に、廃棄物法は廃止され（従来から実施されている制度は、継続します）、そのかわりに循環経済・廃棄物法が制定されました。この新しい法律は、将来まで持続できる経済社会を作り上げるために、循環を基調とする経済活動（＝循環経済）を推し進め、製品の生産から廃棄までに至るすべての活動で廃棄物があまり発生しないようにすることを、基本理念にしています。

3. バスの活用

中心区間の路線バスの利用が便利で快適であり、多くの市民が利用していること、バスが環境問題の解決に貢献していることも、きわめて印象的です。

(1) 市内路線バスの利用のしやすさ

中心地区とそれに接続する地区には、9路線、50台ほどの市営バスが走っています。平日の朝7時から夕方7時頃までと、土曜日朝7時から午後3時頃までは、各路線15～30分ごと、路線が重なる部分では5～15分ごとに運行します。そのほかに、中心部と郊外を結ぶバス路線として、市営バスのものと、5、6の小規模の民間企業のものがあります。

ただ、土曜の午後と日曜祝日の運行回数は、中心地区路線、郊外路線とも極端に少なくなり、日曜祝日には運行しない郊外路線も多い。なぜなら、学校と職場は、日曜祝日だけでなく土曜も休みである上、商店（レストラン、喫茶店を除く）も、日曜祝日と土曜の午後に休むからです。なお、鉄道も、通勤、通学の比重が大きい路線は、バスと同様に、土曜の午後と日曜祝日の運行回数が極端に少なく、日曜祝日には運行しないものすらあります。

大型バスは、1台だけのものと2台連結のものがあります。少数ですが、ライトバンを運行している路線もあります。

大型バスの車体は低く、出入口が広く、1台当り2カ所もありますから、乗り降りし易いものです。車椅子、乳母車も、そのまま簡単に載せられます。乗り降りの際に、車体を傾けて、道路との段差を小さくできるバスもあります。老人、車椅子の身体障害者、乳母車の母親がよく乗っています。乗り降りの際には、見ず知らずの人でも、当然のこととしてこれらの人に手助けをしています。

普通乗車券の料金は、大人2マルク（130円）、12歳未満1マルク（65円）です。これは、乗車のたびごとに運転手から買いますが、その利用者はあまりいません。むしろ、回数券の方がよく利用されます。6枚1つづりで、大人10マルク、12歳未満5マルクです。12歳以上の学生用もあります。回数券は、運転手または市内10数カ所の販売所（バス営業所、郵便局、旅行会社など）で買うことができます。どちらも、乗車すると、車内の検札機に券を自分で差入れ、スタンプを押しておきます。回数券を運転手にみせる必要はありません。同一方向なら1枚で2回乗継ぎができ、有効時間は乗り始めから2時間です。別の路線の停留所に1回の料金で行けますし、それに加えて、途中下車して買物をして行けるわけです。

(2) 環境定期券

普通乗車券と回数券の外に、有効期間の1カ月の環境定期券（Umweltkarte）があります。市内区間の市営バスにどこでも、いつでも、何回でも乗り降り自由、乗車中に所持していさえすればよく、運転手にみせたり、検札機に入れたりする必要はない、とても便利なものです（但し、夜8時以降は、乗車の時に運転手に見せます）。時たま係員が乗りこんできて、検査することがあり、券を所持していないと罰金60マルクをとられます。

料金は、一般用で、38マルク（2500円）。10往復半の料金と同じです。誰もが証明書無しに、手軽に市内10数カ所の販売所で買えます。他人への譲渡も自由です。学生用は、29マルク（1900円）で、他人に譲渡できず、本人

であることを示すために、顔写真を貼ったマスター券と一緒にないと買ったり、使うことができません。

この定期券に「環境」という名がついているのは、車による公害、環境悪化を防止し、交通の混雑を少なくし、駐車場の不足問題を解消することを目的にするからです。市の中心区間で、バスによる人の移動を便利かつ有利にして、勤務、通学、ショッピングのための乗用車利用をできるだけ少なくすることを狙っているのです。中心地区のはずれに大きな駐車場を作り、郊外から乗用車でくる人がそこに駐車して、中心区内はバスで移動するように推める Park & Ride 制度もあります。

多くのバスは、廃棄ガスがあまり沢山出ないものです。

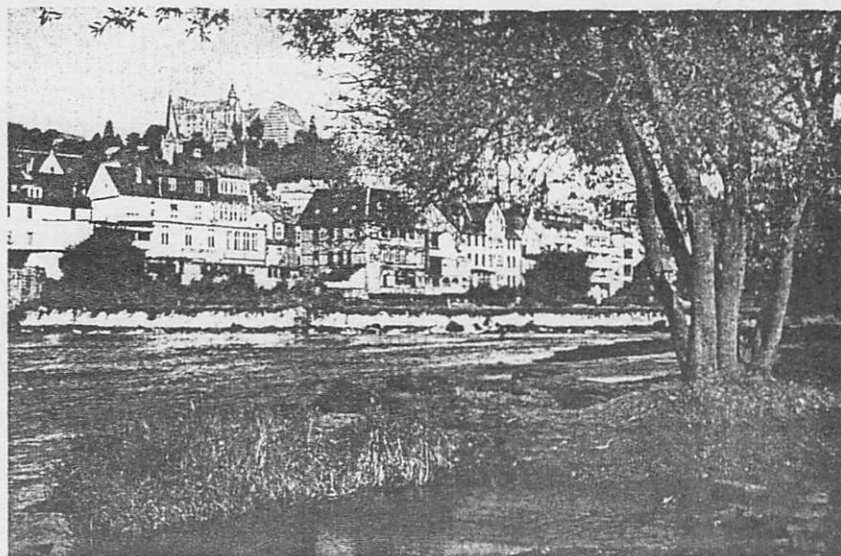
環境定期券の利用者はかなり多いように思われました。これを買っておくと、バスをできるだけ多く利用したい気持ちになり、私達は実際によく利用しました。バスの利用者が多い原因の一つは、この環境定期券制度であると思います。

不正乗車は余りないようです。係員の検査の回数は少なく、9カ月間の滞在中で3回しか経験しませんでした。検査の時に罰金を払わされている人を見たこともありません。

おわりに

私達のドイツでの生活は、ドイツの素晴らしいところをつまみ食いにしてきたようなものでした。1年にも満たない滞在では、とてもドイツの全体像を見たとは言えません。私達の目には写らなかった醜い面もあるでしょう。しかし、その素晴らしいと感じたことは、素直にそのまま心に残したいと思います。

まだまだ、外にも、印象的なことがありましたが、報告はここで打ち切らせていただきます。日本と比較して、いろいろと論じてみたいとも思います。でも、それは、また別の機会での話題にしましょう。



(マルブルク:

「ドイツの偉人とその都市」1966、ドイツ連邦共和国新聞情報庁より)

ホームステイのすすめ

高木美枝子

6年前の9月25日の朝、私たち家族はそれからの10ヵ月をドイツで過ごすため、フランクフルト空港に降り立ちました。入国手続きや荷物受取などをしてしていると、私たちを呼び出す構内放送が聞こえてきます。一体何だろうといぶかりながら所定の場所に行きますと、待っていたのは、夫の知り合いで、フランクフルト近郊のロルシュという町に住むG夫人。何と私たちを迎えにきてくださったのでした。それから私たちは彼女の車でアウトバーンを走り、一路G家へ、そして思いがけなく泊めていただくことになったのでした。ご家族の暖かいおもてなしを受けドイツの人の暮らしぶりを間近に見せていただき感激でした。これが、私たちのホームステイ初体験です。それからワイマールでは夫の昔の恩師が泊めてくださったり（そこは決して広いとは言えないアパートで、ご自分は居間のソファに寝て、私たちのためにベッドを空けてくださったのでした）、ハンブルクでも同僚だったV先生のお宅に泊めていただいたりと、いろいろなところで私たちはすばらしい体験をしたのでした。

帰国してから、私たちはドイツで親切にいただいたこと、お蔭でさまざまなことを見聞できてとても実り豊かな滞在だったことに何か感謝したい、何かできることはないかと考えて、ホームステイを思い立ったのです。我が家は新築はしたものの、実は客間もなく、和室も四畳半一間しかないのですが、お客様にはこの四畳半を使っただけで何とか寝泊まりはできるし、実際大柄なドイツ人には気の毒なほど狭い我が家ですがこれも日本の現実と開き直って、早速、日独協会を通じてホームステイ受入れの登録をしました。最初のお客様はベルリン出身の16才の高校生の男の子、第4外国語で日本語を勉強して3年、語学力を磨くため夏休みを利用して1ヶ月間日本を一人旅ということでした。とても勉強熱心で、いつも自家製の単語帳片手に話しかけ、新しい言葉を書き入れ、ぐんぐん上達するので驚きました。日本に興味があり何でも味わってみたいという好奇心がいっぱいで、私の手料理もこれは何あれは何と言いながら喜んで食べてくれました。9日間の滞在中、香大の夫の学生さんたちも来てくれて、一緒にお喋りをしたり、小豆島に案内してもらったり、夏祭に誘われたりと、とても楽しかったようです。

それから香川とボンの協会同士の姉妹縁組が結ばれて、互いにホームステイを受け入れあうことになってから、去年、我が家にもボンからのお客様がいらっしゃいました。やはり日本大好きで、とても日本通の方で、14歳と11歳の二人の男児のお父さんですし、うちの子は15歳の女の子と12歳の男の子ですから、とても話が弾みました。この方とはこれがご縁で、実は今年4月に私たち一家が逆にボンのお宅に泊めていただきました。家族ぐるみで親しくなれるのはホームステイならではの良さだなとつくづく感じました。子供たちにも良い思い出になったようです。この方(H. Schreckさん)とはホームステイの意義で大いに意気投合し、それぞれの協会ではホームステイのことで協力しあうことになりました。

一般に、ホームステイを希望する人は、その国が好き、知りたい、味わいたいと思っているわけですから、少しでもその望みを叶えてあげられたら良いなと思います。食べ物や寝るところなど、心配すればキリがないのですが、やはり普段のままありのままの良いのだと思います。私たちもドイツに行ったとき、家庭で普通に食べていらっしゃるものを共

にいただくときが、一番楽しく珍しく、いろいろ説明してもらったりして面白い体験でした。私も、料理は下手ですが、郷土料理や、季節の普通のお惣菜を味わってもらいます。日本は魚の種類が豊富で新鮮で料理法もいろいろですし、野菜の煮物などドイツにはない素材も多いので、そういうものが喜ばれるようです。そして、一緒に散歩したり、近くのマーケットに買い物に行ったりするのも楽しいことです。もちろん、町や近郊の名所もそこに住んでいる人に案内してもらったほうがずっと良いに決まっています。その土地独特の風景や、文化や人情をずっと細やかに立ち入って味わうこともできるのです。そして何より有り難いのは、費用のかからない旅行ができるということです。これは正に助け合いの精神なのです。こんなに素敵なホームステイを、出掛けることも受け入れることも、もっとたくさんの人が気軽にやってみられたら良いなと思います。

クリスとの1週間

山 田 美智子

1996. 8. 12 (月) から8. 19 (月) まで、わが家にボン大学で日本語を勉強しているクリスティーン・ヘメリヒさんがホームステイをしました。

私方の家族は 夫 (55)、私 (54)、長男の亮 (28、大学院生)、の3人。長女 (26) は旅行中のため不在でした。

私たちは、彼女のことをクリスとよんでいましたので、以下そのように書きます。

クリスの滞在中の日程については、私方では、これといった計画をたてずに、彼女の希望をきいてから決めようということにしていました。そうして、クリスと私たちは1週間を次のように過ごしました。

8月12日 (月)

クリスは9:35に関西新空港に着いたあと、1人で新大阪、岡山を經由して、15:02着のマリンライナーで高松駅に到着。香川日独協会の塩見さん、阿部さん、彼女らの友人の岩崎さん、それに私の4人で出迎えました。塩見さんは3月に1週間、クリスの家でホームステイをしたので感激の再会です。そのあと全員わが家で夕食。日本の代表的じゃがいも料理ということで肉じゃが、もちろんビールで乾杯です。

2階の長女の部屋が空いているので、ここを使ってもらうことにしました。襖なので鍵がかからないのが気掛かりでしたが、クリスは全然気にしていない様子。窓は開け放しても心配ないことを説明。

「明日、きゅうじまで寝ていてもいいですか？」

「はい、9時でも10時でも、あなたが起きるまで起こさないようにします。でも、起こしてほしい時間があれば教えてください。」

結局、クリスは翌朝10時前に起床。

ドイツ人は皆早起きかと思っていましたが、彼女は1週間ずっと9時~10時起きでした。

(高松到着時)



8月13日(火)

クリスと夫、亮、私の4人で、近くの木太町駅からJRを利用して栗林公園へ。わが家には車がないので、今回はどこへ行くのもスタートは殆どがこの木太町駅からでした。

途中、住宅地の中に田んぼがあることに、クリスは驚いたようで、町の中にファームがあるなんて、と言って珍らしがっていました。また、所々に貼ってある選挙をにらんだと思われるポスターにも目をとめ、「あれは政治家ですか？」いくら、よそいきの顔できめていても芸能人には見えなかったようです。



(栗林公園で)

栗林公園では、色のついた鯉と抹茶と障子が気に入って自分のカメラに収めていました。昼はうどん。セルフサービスの店で、ちょっとむずかしそうでしたが、それでもおいしいと言っていました。(約1ヶ月後、新潟から届いた手紙に「今日、そばを食べました。食べるのはうどんの方がやさしいです。」とありました。)

クリスは商店街にも興味を持っていて、もっと長い時間居たかったのですが、空もようが怪しくなってきたので急ぎ帰宅。

夕食後、片付けをしていたクリスが、夏場時々やって来る「ヤモリ」を見つけて驚きました。台所の窓の外にはりついた白い腹の15センチ位のヤモリは、灯りにやってくる蛾を食べるために大変ユーモラスな動き方をします。ドイツではこんな動物は見かけないそうです。その後、毎晩のように同じ時刻、同じ場所に現われるので、まるでクリスに会いに来ているようだと楽しみにしていました。

それから、私たちはヤモリを見ると、「クリスの友だちがまた来てるね。」と言っています。

夜は幸い雨も上がって、高松まつりの花火見物に。向いの平畑さんが、よく見える所へ案内して下さることになり、孫の龍くん(小六)、秀くん(小四)とクリス、夫、亮の計6人、自転車で出発。私は自転車にうまく乗れないので留守番でした。平畑さんには数日前に、クリスがホームステイすること、彼女が花火大会を楽しみにしていることを話したところ、これを聞いた孫さん達が、「お姉さんを案内する。」と張りきっていたそうです。クリスも元気な彼らをさっそく「花火ボーイ」と名付けました。

8月14日（水）

思いがけず台風の到来。クリスは、もちろん初めて。

朝から風が強く、家で折り紙と碁をして過ごすことになり、折り紙は亮がコーチ。仲仲上手で、鶴もきれいにでき上り、舟や鳥も一緒に自分の荷物の中に入れました。碁は夫と五日ならべ。

8月15日（木）

亮とクリスで屋島、四国村へ。ミニかずら橋では、かなり悪戦苦闘したもよう。韓国在住で、日本へ旅行に来ているというドイツ人男性に偶然会ったとのこと。クリスは久しぶりに思いきり母国語でのびのびと話すことができたようです。

夜はクリスと亮、それに従姉の未欣子と3人で、高松まつりフィナーレの総おどり見物。

8月16日（金）

朝、クリスがまだ寝ている時間にドイツから電話。早口で「クリスティーネ！」しか聴きとれないがお母さんらしい。「はいっ！ OK！」とだけ言って、階段下から大声で呼ぶ。クリスはお母さんからの電話にうれしそうでした。

時差から考えるとドイツでは真夜中のはず、ちょっと不思議に思ってたずねると、お母さんは見に行っていたオペラが、ちょうど今終わったところで、とても素晴しかったという電話だったそうです。

午前中ゆっくり過ごして、午後は近所の石川さん宅でお茶を飲みながらの話、クリスと石川さんご夫婦、長女でこの春から社会人の美和さん、亮と私の計6人。石川さんの御主人は以前ドイツへ出張されたことがあり、奥さんも昨年ヨーロッパ旅行を経験。石川さんと私たちは、どちらかに外国からの客人や留学生が来た場合、お互いに招き合うことにしています。クリスが到着した12日にも、奥さんと次女の弥生さん（高3）が、わが家での集まりに加わりました。

石川さん宅から帰ったあと、今日はクリスがドイツの家庭料理を作ってくれるということで、近くのスーパーマルナカへ材料の調達に。

クリスはマルナカも気に入って、私が買い物に行く時、何度か一緒に来ました。彼女が、いつも道のまん中を歩くので、私は少し心配でした。ドイツでは住宅地のこういう細い道には車が通らないのかな、と思いました。

クリスはトマトを切るのも、チーズを混ぜたり、パン粉をつけたりするのにも皆、椅子に腰かけて、食卓でします。以前、テレビのドイツ語会話の中でもそうしているのを見たことがあります。私たちは普通こういうことをする時、立って、流しのところにある調理台でします。これもそれぞれの習慣の違いでしょうか。

先ず、カマンベールチーズやパプリカで、サンドウィッチの中味のようなものができました。次はトマーテンズuppe、赤い色がとても鮮やかです。最後はフランスパンを揚げパ

ンのようにして砂糖をいっぱいふりかけ、これに生クリームの泡立てたのを添えます。
これは大変ボリュームがありました。

8月17日（土）

高松城と商店街をリクエストで、今日も木太町駅から、クリスと夫と私の3人。コンピラさんはどうかな？たずねてみると、どうやら彼女は高松のガイドブックを見てきたらしく、金刀比羅の名前にはなじみがないらしい。

日本料理の昼食を終えて、アイパルへ寄ったあと、いったん帰宅。

この日は夕方から、塩見さんはじめ香川大学生のグループで、カレーパーティーをするとのこと。私が木太町駅までクリスを送って行って、3つ先の昭和町駅で塩見さんが待っているという段取り。午後9時すぎ、パーティーを終えたクリスは車で送ってもらいました。

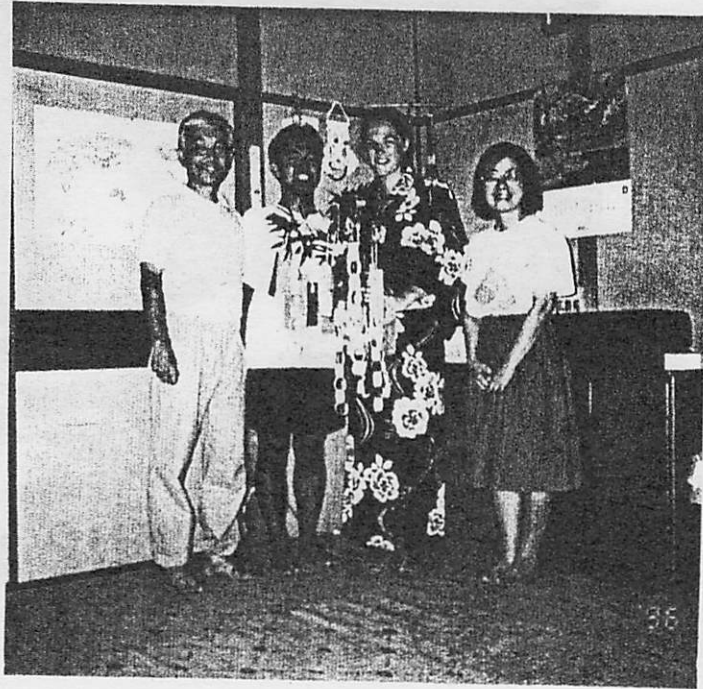
8月18日（日）

今日は、もうゆっくり家で過ごすのかと思ったら、クリスと亮は女木島へ泳ぎに行くといひます。先日、屋島の上からちょうど目の前に見えた女木島へ行ってみようという話になったげな。

クリスの家も学校も内陸なので海が良いのかもしれませんが。またまた木太町駅から出発。夕方、日焼けした顔で機嫌よく帰ってきました。

（浴衣姿のクリス）

夜、浴衣を着て写真を撮ろうと話していたら、クリスは待ちきれなくなって、2階に掛けてあった浴衣を自分で着て降りてきました。但し、裏返しに掛けていたのでそのまま、しかも打合せも逆です。石川さんに応援をたのんで着付けをしてもらい、無事写真は撮れましたが、女木島で日に焼ける前に撮っておけば良かった、と思いました。



8月19日（月）

いよいよ次のホームステイ先へ向う日、あっという間の1週間でした。クリスと亮と私の3人、出かけようとしたら、ちょうど龍くん、秀くんが外にいたので揃って記念撮影。

(花火ボーイ達と)



クリスに「花火ボーイ」と呼ばれて彼らは大いに気をよくしていました。

塩見さん、阿部さん、岩崎さんと、香川大学の近くで落ち合って、副会長の中村さんの御宅へ。

中村さんはさすがに外国の人達とのおつき合いになれている御様子。世界各国の珍しい人形や民芸品が並べられた棚にも

それが窺えるようでした。大きな器に入ったうどんを皆でごちそうになり、楽しく話をしたあと、亮と私はここで皆さんとお別れ。クリスは17kgのリュックと共に、塩見さんのところへ。



(中村さんのお宅で)

以上がクリスと私たちの1週間でした。終わってしまえば本当に短かったという感じです。

わが家では ホームスティの受入をしたのが 初めてなので、これでよかったのか、ど

うかわかりません。とにかく、特別なことはしないで、特別な料理も作りませんでした。

それから、彼女が単独で屋島や栗林公園へ出かけた方が良かったかな、という気もしますが、そうしなかったのは現在ターミナルの瓦町周辺があまりにもややこしくて、交通機関の説明がしにくかったこともありました。また、自転車で走るには少し暑すぎると思いました。

なお、言葉に関しては、クリスの日本語が上手だったので、殆ど不自由なく過ごしました。通じにくいところは、彼女がわが家のドイツ語の辞書で示してくれました。ただ、亮と2人で出かけた時には、主として英語で話していたそうです。

クリスはこのあと、岡山の塩見さんの実家、新潟のワークキャンプを経て、宝塚、鳴門などでホームステイをして、10月初旬に帰国予定、ということでした。

私たち家族にとっては、貴重な体験となりました。

また、近所の皆さんにも、ホームステイが身近になったのではないかと思います。このような機会をいただいたことと、いろいろ御世話になった皆様に御礼申し上げます。

水谷 好子

「日本語のスピーチ・コンテストで優勝しました。ごほうびは何と1週間の日本旅行です。会社の出張もあって、1ヶ月日本にいられます。」

去年の3月、日本に心を残してドイツへ帰って行った友人、杏土玲亜からの手紙でした。何とか日本で仕事をしたい。日本の会社で仕事する方法はないものだろうか。是非、もう1度日本に来たいのだが、...と言っていた彼女の思いが、早くも1年後にこんな形で実現するなんて、と思いながら、彼女との出会いを思いおこしてみました。

彼女はハンブルグで日本の会社に就職したのがきっかけで「日本へ行って日本語の勉強をしたい。」と思い高松へやって来ました。東京を選ばなかったのは、外国人がたくさんいて、日本語を話さずに済んでしまうことを恐れたからだそうです。日本語学校で1年。脳目もふらずに勉強したようです。随分上達したのですが、彼女は満足しませんでした。もう1年勉強すれば日本語は自分のものになるだろうけれど、今のままでは中途半端に終わってしまう。意を決して、あと1年、勉強を続けることにしました。私が出会ったのはその2年目も半年を過ぎたころでした。私の耳には、もうほとんど日本語をマスターしていて、話すことに不自由はないと思われましたし、ワープロを使って書く日本語は時折、交換に???というのがあるのですが、音にすると同じ。ハハーンなるほど、と思わず笑ってしまうというぐらいで、私よりずっとずっと筆まめでした。学生が勉強するのは当然と言えば当然ですが、私から見ると、彼女の毎日は、将に朝早くからの勉強。学校での授業。終わると又、自分で勉強。間で少しアルバイトをするという具合で、週末になるとあちこち旅行したり、仲間と遊んだりする若い外国人の多い中で、何と堅実のことか、...とた々`た々`感心するばかりでした。こんな毎日で日本での生活が楽しかったと言えるのだろうか、と私が心配になる程彼女の日々は質素で地味だったのです。

あれから1年。ドイツで彼女が努めた会社は東京、大阪、名古屋に支社を持っていましたが、今回、出張で大阪に来られたのも、彼女自身のたゆまぬ努力が社内で評価されたのだと思います。とにかく思いがけない来日となり1年ぶりに再会した私は彼女の変身ぶりにあっ！と驚いたのです。

長い髪を束ねて、家の中では半天を着ていたあの杏土玲亜が、ショート・カットにピアス。輝くばかりの指輪をして、現われました。金のボタンが並ぶ紺のスーツは落ち着いた上品さの中にも若さがあふれ、いかにも仕事をしている女性にふさわしい、ハイ・センスなものでした。身のこなしも眩しいくらいです。そうか私の見ていた去年の彼女は、ほんの一部にすぎなかったのだ。今の彼女が本当の姿であって、高松での2年は彼女にとって修業の期間だったのだと思い当たったのです。その地道な修業が実を結んだと言うのでしょ

うか。またまた思わぬ展開となりました。1ヶ月の日本滞在の間に何と5月からの大阪支社勤務が決定したのです。ウッソ —— と言いたい程の驚きでした。

心はずませて機上の人となった彼女は1ヶ月間、ドイツで仕事をした後、ゴールデン・ウィークに、今度こそ念願叶って仕事をする為に日本にやって来ました。そして現在実に誠実に、人と話をするをとても大切に思いながら営業活動をしています。これがドイツ人女性なのでしょうか?? 私のドイツへのあこがれは増々強くなりました。こんな人達の住む彼の地を私もいつか訪ねてみたい!とその日を夢見ながら、私自身の毎日を生きているところです。

友の名は アンドレア・ベッカー。



ハンブルク港

(ドイツテレコム株式会社の「ドイツ連邦共和国 写真観光旅行ガイド」より)

ドイツ語と私

虫 本 光 徳

香川日独協会に加入したものの、結成時に出席して以来、一度も例会に参加していない不真面目な会員です。私は、かつては「独逸」と書いた現代のドイツ連邦共和国が好きというよりも「ドイツ語」が好きであるという理由から協会に入らせていただきました。ドイツと聞けば、二度の世界大戦を起こした国家、ビールとワインの国、勤勉と規律を好む国民、バッハ、モーツアルト、ベートーベン、ゲーテなどの世界に名高い人々を生んだ国というイメージがわいてきますが、私は残念ながら一度もドイツに行ったことがありません。

私がドイツ語と初めて接触したのは高校時代でした。高校生ながらドイツ語を学ぼうと言う小さな同好会に参加したことからはじまった。外大出の英語教師が大学時代にドイツ語が第2外国語であったことから教えていただいた。当時私がどの程度のドイツ語を理解していたか全く記憶がないが、文化祭のときに覚えたての簡単な単語を展示を見物に来た人達の前で発音してみせたことがあったが、今から思えば赤面したくなる。その後受験勉強に忙しくなり、もうドイツ語を習う余裕がなくなって頓挫してしまった。

大学入学前の春より、高校担任よりNHKのラジオ講座を聞くことを勧められた。最初の講師は平尾浩三先生だったと記憶している。応用編には中島悠爾先生とMichael Münzer氏による興味津々の推理ドラマもあった。テレビ講座では講師に、小塩節先生、早川東三先生など著名な先生方がいた。これらの講座を通じて少しばかりの基礎知識があったためか大学教養課程（私の場合は2年間）でのドイツ語の講義にはスムーズに入っていた。当時の履修単位は2年間で合計12単位、因に英語は10単位であったから、英語に比してドイツ語のウエイトがいかに大きかったかがわかるが、英語が既に世界の主言語になっていた時代にしては偏っていたと思われる。本気で熱心にドイツ語を勉強している同級生はあまりいなかった。ぎりぎりの点数で単位が取ればよいと考えている者が多く、別の方面（スポーツ、音楽、囲碁、学生運動など）に青春のエネルギーをぶっつけていた。次の4年間の専門課程（医学）では全くドイツ語の講義はなかったが、教官の大部分は専門用語はドイツ語を使い、英語は少なかった。高学年になるにつれて英語の使用頻度はふえてきました。臨床実習などでは初めはドイツ語を用いていたが、英語が今後主流を占めるだろうと考え診療記録（チャート、カルテ）は英語で書くことと決めた。しかし、教授や先輩の先生方にはドイツ語で接した方が、理解されやすかった。

大学時代には「ドイツ医学研究会」なるサークルに参加していたが、私自身はドイツ医学に興味がなく、ドイツ語会話に重点をおいた。その頃当大学に留学中のドイツ人理学療法士（女性）にお願いして会話練習を行っていたが、参加者も少なくあまり長続きせず、

彼女が本国に帰ったあとは殆ど活動しなくなった。今もそのサークルが現存しているか定かでない。

大学卒業後、数年間はドイツ語を勉強する機会が殆どなかったが、仕事に少し余裕ができた頃にラジオ講座を再び聴くようになった。特に、文法を忘れない程度の接し方で、さほど力を注いではいなかった。本格的に勉強をしはじめたのはここ数年である。ラジオやテレビ講座、BSの ZDFニュースなどを時間のある限り利用している。会話訓練のために香川大学のドイツ人講師の先生にお願いして個人レッスンを受けている。瀧川教授にはいろいろと相談にのってもらい、私に合ったテキストを紹介していただき、とりわけ外国人向けのテキストは東京のゲーテ書房より取り寄せ、自分一人で出来る勉強に使用している。私のドイツ語の学び方、取り組み方は自己流で、能率が悪くとても下手な方法と思っている。独和辞典を片手に文章中の知らない単語をきちんと調べ、文法的にきちんと解釈しないとなかなか次へ進んでいけない。最近、香川大学オーストリア人 Knoll先生より、お叱りをうけ、辞書なしで文章を読みすすめ、ストーリーを大雑把に理解する練習をするように指摘された。「濫読（流読）」というべきものでしょう。関口存男はこの方法が後になって見ると一番近路ではないかと述べています。しかし「精読（熟読）」による方法も必要と思われる。個人の性格や、その語学力、段階によってさまざまな方法を組み合わせればよいのではないか。ドイツ語圏に留学さえすれば流暢なドイツ語がしゃべれるようになるとは思えないが、比較的若く、頭の柔らかい吸収力の旺盛な年代に留学出来れば、上達度は頗る高いであろう。

ドイツ語を通じて、ドイツの歴史、文化、政治に興味をもつようになった。私の部屋の壁にドイツの地図を掲げ、都市と州を見ながらロマンチック街道、古城街道、ライン下りなどあれこれと想像している。また、ゲーテの言葉に「異国の言語を知らない者は、自分自身の言語について、何一つ知らぬ」とあるように、日本語をよく知り、美しくしゃべろうと努めるようになった。日本人は自分の意見をあまりはっきりと表現したがるらない、とよく言われる。（最近の私より若い人達はそうではないようだが。）日本語では何とか相手をごまかせても、いざ外国語に訳そうとすると自分の考えがいかに曖昧で、非論理的であるかをしばしば経験する。あるテーマについて自分の確固たる考えを持っていると自負していても、語学力が貧弱なためになかなか「訳出」できないのである。語学的に上手にしゃべれなくても、論理的で理解されやすく、説得力のある内容であれば会話はどんどんと進行していく。常日頃から社会の諸事象に関心を持ち、自分自身の考え、意見を抱いておく必要性がありそうだ。特に自国の歴史、政治、文化、教育、スポーツ、衣食住、宗教などについて幅広い知識を有しておくことが大切であろう。他国の人の考え方、価値観の相違を考慮に入れて、お互いに理解し合うことが重要である。そのためには、通訳を通してではなく、共通の言語、英語が出来ればよいが、ドイツ語圏の人に対してはドイツ語をもってコミュニケーションをつけるべきでしょう。

停年退職された人達の中で、語学を熱心に学ばれている方々がいる。趣味のうちで、ス

ポーツ、俳句、焼き物などと並んで、外国語に取り組んでいるのである。「ボケ」防止に
よいとの信念で「60の手習い」で早朝から、ラジオやテレビを通じて、さらに語学学校や
小さい語学サークルに加わって勉強している。もちろん外国旅行の目的の人もある。ドイ
ツ語に限らず一つの外国語を学んでいると、それが話されている語学圏の国家、民族に大
変に興味を持つようになり、殆どの人が親近感を強く抱く。外国語を通じてのその国の歴
史、文化、国民性などに関心が高まるためであろう。外国語学習の長所の一つはその辺に
もあるのでしょう。流暢に話すことに越したことはないが、流暢さのみに固守して、会話
の内容が単純で、幼稚なものも困る。日頃から、自分の意見や構想をどのように表現したら、
相手によりよく理解してくれるか、日本語のみならず外国語において鍛練することが肝要
であろう。

中部ヨーロッパの大国ドイツと東アジアにある日本の両国を、日独協会の催すさまざま
な会合に参加して多方面から見つめ、考えそして比較してゆくことが大切と思われる。先
の大戦でともに敗戦国となり見事に復興した両国が、21世紀に如何に進んでいくべきかを
多くのマスメディアから情報を得るように努めねばならない。「百聞は一見に如かず」の
格言のごとく、ドイツに行って、このまなこで現代のドイツを見、ドイツ人と言語を通じ
て理解し合うために、コミュニケーションの手段としてのしっかりとしたドイツ語を身に
つけ、そして、「民間外交官」の一人となることを私の本望としている。近い(?) 将来、
ドイツに行けることに胸を膨らませながら、今日も少しずつドイツ語を読んでいる。

— 終 —

思い出のドイツ旅情

坂出市 今田 求

私が最初にドイツを訪れたのは、25年前の秋でした。フランスからベルギー、オランダを経由して、バスで西ドイツに入りました。経済都市デュッセルドルフ、首都ボン、そして金融都市フランクフルトへと走りますが、その間、道路に沿って流れるのがライン川です。

ライン川は中欧最大の河で、全長1,300 kmに及びます。経済的見地からもドイツの重要な川で古来南ドイツからバルト海まで、物資を輸送する唯一の自然の道でした。沿岸の景色は風光明媚で、ローレイなどロマンチックな伝説や、古城が豊富で、河のふちには、協会を中心とした村落が点在しています。

ローレイは見たところ三角形をした黒い岩山で、船の行く手を遮るように、川幅が急に狭くなっております。折しもローレイにさしかかったときは、夕暮れ時でした。時も同じその昔、白衣をなびかせ、頭に冠をいただいた妖精が、ローレイの上に立って朗々と歌う声に、船乗りたちが惑わされ、岩にぶち当たって死んでいきました。時の首領は、怪しきものと4人の兵を送り、征伐させようとしてしました。妖精は兵に討たれんとしたとき、自ら冠をとってローレイの上からライン川に投げ込んだら、大波が起こってその妖精をさらっていきました。

以後、夕暮れ時に物悲しい妖精の歌声が、どこからともなく聞こえてきたという魔女ローレイの物語りは、あの歌とともに世界的に有名となりました。我々もバスの中で、ガイドの説明を聞きながら、全員で合唱したことです。

さらに行くと、ライン川の中州に、窓のないきれいな白い館があります。夫が妻の不貞を怪しみ、誰も近づけないところに館をつくって妻を幽閉してしまったのです。妻はその館で夫そっくりの男児を出産して、夫の疑いを晴らしました。子供は大きくなって母を迎えに行きましたが、かりそめにも疑いを受けた母は、その館を出なかったという悲恋物語があります。ジェラシーは女性の専売特許のように言われてきましたが、実際は男性の方が疑い深いのかも知れません。

ドイツのはずれで、スイスと国境を接するところに、コンスタンズという小さな町があります。赤レンガ造りの建物が多い静かな町でした。

1414年から4年間、コンスタンズ宗教会議が行なわれました。当時の人口が1万人というときに、司教などで84千人に膨れ上がりました。宗教改革を支持したために、法王から破門されたフスが、この宗教会議で思想の取り消しを求められたのを拒否したため、火あぶりの刑に処せられたという歴史のある町です。

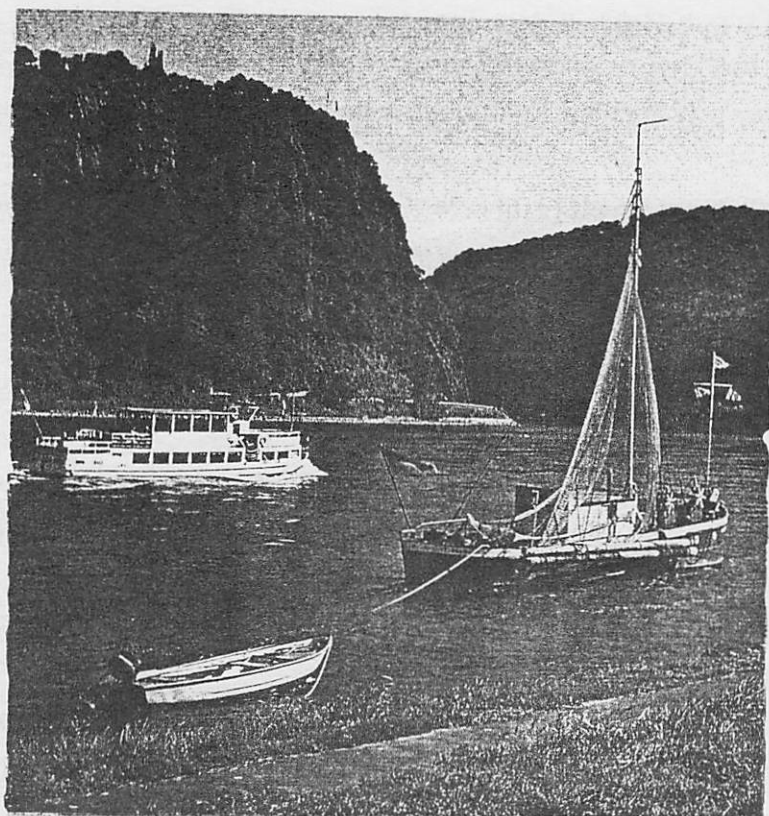
コンスタンズは宗教を中心に栄えた町で、至るところに教会がやたらと目につきます。

私の泊まったインセルホテルも、昔は修道院であったといわれます。

窓の下には、ライン川の源をなすコンスタンズ湖があります。湖畔には白色灯が輝き、湖面には街路樹の影を落としていました。まことに詩情豊かであって、月の光を浴びて、誰か？と散策できたらと、ロマンを駆り立てられるところです。

私の英会話の学習仲間に、この2年間で7回もドイツへ行った人がいます。彼女は当協会の会員ですが、お嬢さんがドイツでピアノの勉強をしておられますので、お一人で何回も行くことになります。その都度、ドイツから英文の絵葉書を頂戴しますが、回数が増すにつれ、ドイツが大好きになられるのを感じます。そのうち、ご主人よりドイツが好きになりはしないかと心配しております。

明治以来の日本は、社会制度や医学、音楽など広い分野で、ドイツをお手本にしてきましたが、ドイツの美しい自然と古い歴史、そして豊かな文化的遺産もまた、旅する人に生涯忘れ得ぬ思い出を残してくれます。



ローレイ

(ドイツテレコム株式会社の「ドイツ連邦共和国 写真観光旅行ガイド」より)

私のドイツ随想録

参議院議員 真 鍋 賢 二

去年の夏の選挙で皆様のご支援・ご協力を賜り、当選させて頂きましてから、早いもので、1年余りが経ちました。国会を中心に活動して参りましたが、先行きが不透明な時代にあって、自分の信念に忠実に政治の道に専念してゆこうと考えておりますので、今後とも、よろしくお願いいたします。

さて、私がドイツをはじめて訪れたのは、今から30年程前。それから、3回、ドイツを訪問する機会がありました。そして、皆様からドイツの印象はと聴かれると、私は決まって、「日本人ととてもよく似ている。特に物事に取り組む姿勢の生真面目さが・・・」と応えています。

もっとも最近、訪れたのが、あのベルリンの壁が崩れて1年が経った90年11月。その時の印象は40年余の間、冷戦の象徴であり、東西ドイツを分断してきたあの壁が、こんなにあっさりと崩れ、アッという間に壊すことができる事への驚きと、改めて人間の愚かさ、時代の持つ残虐性を感じた次第です。

そして、東西ドイツが統一され、さぞかしヨーロッパの政治経済の中核となって発展していると思って実際にベルリンの町並みを歩いてみると、率直に言って私の想像した都市ではありませんでした。東西に別れていた時代が余りにも長く、私達が想像しているような進歩は、簡単には遂げられないことを改めて実感した旅となりました。しかし、その後ドイツは着々と進歩を遂げ、特に東ドイツ地域の経済は、91年夏以降、上向きに転じ急速な成長を続けていると聞いています。

こうした急速な成長の裏側には、もちろん旧西ドイツの巨額な資金移転に依存している事は周知の通りですが、私はそうした事実を突き付けられると、当時旅で出会った旧東ドイツのパン工場で働いていた女性の言葉が思い出されてなりません。その女性は旧東ドイツ時代は決まったパンを決まった量だけ製造すれば良かったけれども、統一後は、西側のように多様な種類のパンを需要があるかぎり作り続けなくては行けない。かつ新しい製品を次々と考案し国民のニーズに応じていかなくてはならない。とても西側のように出来ないと嘆いたことが、今でもはっきりと脳裏に焼き付いて離れないのです。

東と西を50年近く分断した体制の相違は、体制だけでなくそこに住む人たちの物の考え方、生活までも大きく変えてしまいました。しかし、その後ドイツは、歴史の傷を癒しながら、着実に確かな足取りで進歩を続けています。

日本との関係も政治・経済はもちろん環境、国連改革などグローバルな問題についても両国間が協力してやっていくことになっていきますし、既にその具体的な行動に移っています。

私も国会議員としてまた、日独友好議員連盟の一員としてさらに日独関係が緊密にかつ友好に発展していくことの一翼を担うよう引き続き努力して参る所存ですので、香川日独協会の皆様のさらなるご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、香川日独協会の会員の皆様のご多幸と協会のますますのご発展をお祈りいたしまして私の皆様に対する言葉と致します。



ベルリン

(ドイツテレコム株式会社の「ドイツ連邦共和国 写真観光旅行ガイド」より)

ドイツ在外研究の思いで

西 原 浩

1995年7月より1996年4月までドイツ連邦共和国シュトゥットガルト大学の工業生化学研究室(Universität Stuttgart, Institut für Technische Biochemie)において在外研究に従事する機会を得た。シュトゥットガルトはドイツの南西部に位置し、バーデン・ヴュルテンベルク州の州都で、黒い森として有名なシュヴァルツヴァルトの東玄関口に当たり、ベンツやボルシェの町としてもよく知られている。研究室は1993年に新設されたバイオプロセスエンジニアリングセンターの中に位置している。このセンターは学部卒業生の研究機関として設置され、5つの研究室で構成されている。

私が派遣された工業生化学研究室では次の分野の研究が行なわれていた。

1. 生体物質、特に組換えDNA技術を利用した組換えタンパク質のダウンストリームプロセッシング
2. タンパク質や他の生体物質の結晶化
3. タンパク質工学によるバイオカタリシス(酵素等)の機能開発
4. 酵素によるプロセステクノロジーの開発
5. 組換えタンパク質に基づく環境評価のためのバイオセンサーの開発

私は主として動物細胞に含まれるステロイド水酸化モノオキシゲナーゼ活性をもつP450タンパク質の酵母内での発現及び大量生産の研究に従事した。毎週開かれるセミナー(研究発表、文献紹介等)を通して、酵素工学、タンパク質工学及びバイオセンサーの各分野について最新の情報に接し、知見を深めることができた。

研究室にはドイツ人の他、イギリス、フランス、イタリア、スペイン、ロシア、ヴェトナム、中国、アフリカ(残念ながら国名は失念した)、日本等各国からの研究者が集まり、正に国際化の最先端に位置していた。そのため、研究室でのセミナー等公的な行事では英語が使用され、ドイツ語の不得手な私にとっては大いに助かったが、町に出かけると英語の通じない場合もあり、いろいろ苦勞することもあった。片言のドイツ語で尋ねても、返ってくるドイツ語が理解できない場合が多く、恥ずかしながら、レストランでビールのおかわりを頼むときの「Noch einmal bitte.」と勘定を頼むときの「Zahlen bitte.」が専ら多用したドイツ語であった。

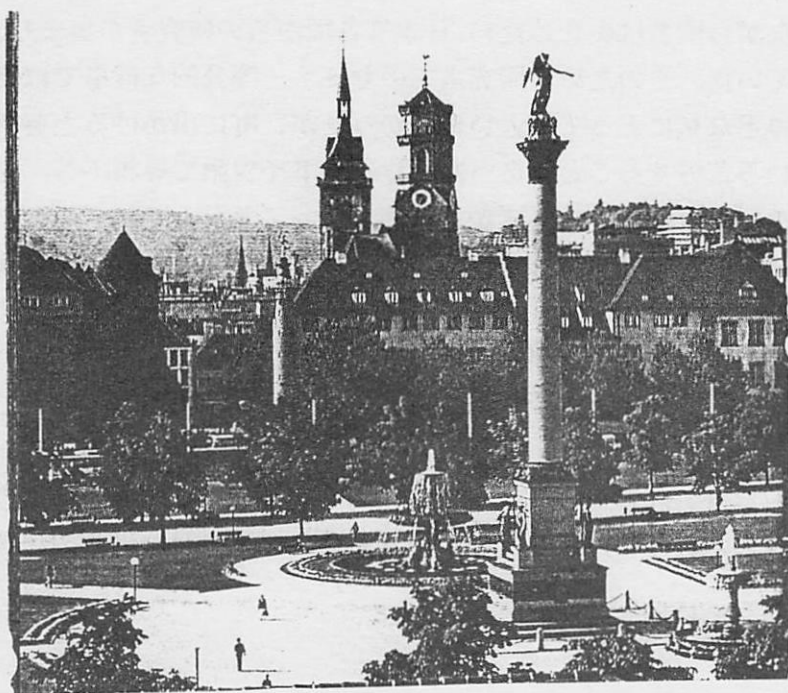
研究室の仲間に誘われて、ビール祭やワイン祭にしばしば訪れた。残念ながら、ミュンヘンのオクトーバーフェストには行けなかったが、少し遅れてシュトゥットガルト近郊で開かれたフォルクスフェストには2回出かけ、1リットルジョッキで運ばれる本場のビールを味わった。ミュンヘンにある有名なビールレストラン『ホーフブロイハウス』のような大きな店が遊園地内に数箇所設営されていたが、どのテントも満員で席を見つけるのに苦

労した。音楽にあわせて肩を組んだり、ダンスに興じるグループもあり、最高の盛り上がりで、ドイツらしいドイツを味わうことができた。

私は香川大学合気道部の顧問を勤めながら、学生や社会人と一緒に合気道をやってきたので、シュトゥットガルトでも合気道をできればと思っていたが、好運にもシュトゥットガルト大学合気道部と、MTVというシュトゥットガルトから少し郊外にある体育館でのグループに加えて頂き、帰国まで稽古を続けることができた。指導はどちらも有段者が担当していたが、私もときどき指導を頼まれたりして、暖かく迎えられた。指導に当たっている人はいずれも日本に来たことがあるようで、合気道に対する熱意は並々ならぬものがあった。

シュトゥットガルトには日本人会（JAPAN CLUB STUTTGART）が1990年12月に組織され、日本の伝統に基づいた催し物を企画したり、対外交流、会員相互間の親睦などを図っていた。また、2ヵ月に1度定期的に会報を発行して日本人会員への連絡に努めていた。私は帰国の少し前に日本人会に入会したため、他の日本人と知り合う機会は余りなかったが、帰国前には不要品の処理で名誉領事館や日本人会の会員にいろいろお世話になった。また帰国直前に日本人会主催で開かれた阪神大震災援助チャリティーコンサートではシュトゥットガルト音大生（日本人）により日本歌曲が披露され、心の洗われる思いであった。他の都市にもシュトゥットガルト日本人会のような組織があると思われるので、長期滞在者に対して香川日独協会から情報を提供して頂けるとありがたいと思った。

9ヶ月の短い期間であったが、在外研究という機会を通して、ドイツについて見聞を深め、ドイツ人との交流の輪を広げることができた。単身で出かけたのでいろいろと苦勞することもあったが、それ以上に収穫も多かった。再度ドイツを訪れる機会が来ることを心より願っている。



シュトゥットガルト

（ドイツテレコム株式会社の「ドイツ連邦共和国 写真観光旅行ガイド」より）

春の旅－中欧の旅

乗 松 達 郎

最近、本のベストセラーリストにヘルマン・ヘッセの「庭仕事の愉しみ」が入っていた。どうして今頃？という気持ちが湧いた。本屋で手にして目次に目を通すと、「紛失したポケットナイフ」Das verlorene Taschenmesserという文章が入っている。実は半世紀前ドイツ語を習い始めて、最初にまとめた文章として学んだのがこれであった。教科書がない時代に先生がガリ版してくれたものである。終戦後間もなく、何か新しいものが生まれて来る感じと大きな喪失感を心中に持っていた年少の身に、ヘッセが、日常生活の友として長い間使っていた小刀への失くして初めて覚える愛惜の思いが通じあったのか不思議に今まで記憶していたのである。大学入試、就職試験をドイツ語で受けた後は、ドイツ語との縁をプツリと断っていたが、この10年ばかり前から、ヨーロッパに遊ぶ機会があり、その縁が少しずつ再び結ばれて、テレビで他の仏、伊、西語と同様、ネイティブ美人のアシスタントに誘われ、先生に当られて困ることもない気楽な気持ちで、テレビの時間を気にする日々となった。しかしなかなか使う機会はない。

スペイン語は僅かに一度、ソレントからカプリ島に渡る船上で、隣合わせのポーランド系アルゼンチン女性と小一時間話しただけ。伊語は結構機会があった。パリでトリノの若者、スコットランドはマクベスの城でミラノの女性、モナコ王宮前でトスカナ人、オルセー美術館前でボルネーゼ人、イタリア旅行中、ナポリ、ティボリ、ラベンナ、ルガノ、ミラノの人、おまけに、昨年、フランス周遊のバスの運転手ブルターニュ人がイタリア語を話して、など機会があって、今もテレビは見続けている。因みにレギュラーゲスト出演している朝岡直芽さんが高松出身というのも、こちらの関心を引留めている一因か。

Ci vediamo una volta!

ドイツ語はもち論機会が多い。ドイツ語圏（ドイツ、スイス、オーストリア）を除いて、スコットランド・インバネスでババリアの女性、アムステルダムでマインツの男性、アッシジでスイス人、フランス・トゥールでブレーメンからの婦人団体旅行のご一行など。アジア人が自国語を話すなどと、先方は全く思っていないから、当然話掛けるのは当方からとなる。平素は内気なのに、旅の恥と気にしないで、多少とも話らしいものを交わし、最後にブオン・ヴィアッジョ、グーテ・ライゼと別れると、後々に写真を見ては旅の思い出がよみがえる。

2度目のドイツ旅行を心に念じてから、ドイツ語がもう少し上手になってからと思いつつも、努力なければ向上なしで今後の期待は見込めないなら、いっそ早く行こうと5月下旬から6月初め、ドイツを中心に、ポーランド、チェコ、ハンガリーと回って来た。宮仕えの身と異なり、今は自由な時間を持てるようになって、気候の良い時季に旅行できるの

は誠に嬉しい。ドイツは、あのハイネの詩、シューマンの曲 Im wunderschönen Monat Maiと歌われているように5、6月が一番良いというが、実際その通りで、緑あふれる眺めはいつまでも忘れ難い。以下脱線が多く、道草を食ってばかりの、はてもない、旅行記をドイツを中心に書きました。

ワルシャワ、ベルリン、ドレスデンと回って昼間の気温で16度、プラハでは30度に近く、到頭ブタ・ペストでは32度、最後フランクフルトでは16度に急降下。雨はワルシャワで文化宮殿に昇っていたら、降りだして30分近く足止め。ベルリン・ペルガモン博物館で展示に圧倒されつつ、閉館時間まで粘って出てみたら、ざあざあ降り、100mは無かったが、バスまで走って、濡れたという2回だけ。この時は、バスから家内の傘を持って引返して来たので、同行の婦人方からの点数を稼いだ。先づは天候は良好。全くWunderschöne Monatであった。木々の緑は目にも鮮やか。マロニエの花は真っ盛り。Lindenbaum、ぶな、ななかまどなどの大木がよく目についた。昨年行った南仏のエクサン・プロバンスのミラボー通りのプラタナスは全く巨木で、道の両側に植えられ、中の道路を覆っている感じだった。そういう大木、高木はヨーロッパの思い出にも数多い。有名なオランダ・キューケンホフのチューリップも巨木の下で一層映えているし、その上に広い池に白鳥が列をなして泳いでいれば、最高の眺めにちがいない。

ワルシャワからベルリンに行くのになぜミュンヘンを回るのか分からないままに、ベルリンに着けば、同行6人様の荷物未着。兎も角、日本食の昼食。ただし、ここはベルリン、日本茶にお茶代を払う。

さて、観光開始。ベルリンの壁で写真パチパチ、もうあの東西統一決定の時の熱気は何処えやら。その時の壁詣では我々一行だけという閑かさ。後で問えば下火になった壁参りに代わって登場し、人気上昇中は建築現場観光。連日一万人を下らないとか。統一後、大論争の果てに

ベルリンを再び首都に決定。公共ビルを始めソニー、ダイムラ・ベンツなど大企業のビル建築ラッシュ振りが例のブランデンブルグ門の南、ポツダム広場を中心に見られる。



(ベルリンの壁)

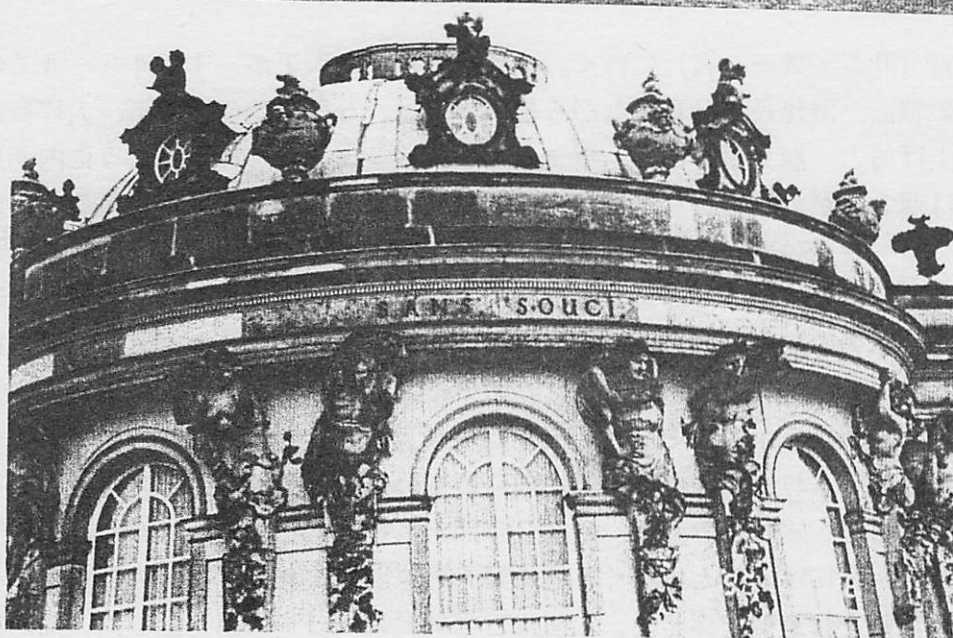
ポツダム広場の近くにはヒトラーの総統官邸、ゲーリングの空軍省などの旧官庁街、戦火によって徹底的に破壊された、第三帝国の権力の中心地の跡は東ドイツ時代、平凡なプレファブアパート群が建っていたが、それらが再開発されている。ここに限らず、アパート群は材料、工法の関係から老朽化が早いため、再建を迫られている所が多いという。ヒトラーが、特命で1938年1月から僅か1年で作らせた総統官邸は第三帝国の権威の象徴を目指したもので長さ400m幅50m、高さ21mという巨大建築物。高松で言えば、中央通りで、裁判所の南の通りから、五番丁までが一つの建物ということになる。ベルリンのビル建築現場というのは確かに驚くが、今度回ったワルシャワ、ライプツヒ、ドレスデン、プラハ、ブタペスト、フランクフルトのいずれの都市でも建築現場のクレーンが目立ち、カメラの視野から外すため苦勞したものである。

東ベルリンではカール・マルクス通りが健在である。彼は思想家であり、レーニン、スターリンのように、政治家として悪いことをしていないから、名前を変えなくても良いと聞いた。

ポツダム宮（サン・スーシ宮）に行く。フリードリッヒ大王が、1745～47年に建てたロココの華。一階建長さ80mながら優美な姿は、6段のテラスの下、大理石の大噴水ごしに見上げると一層見事である。ヴェルサイユやシェンブルンのように内部に入らなかったのは残念だが、絵葉書などで見ると絢爛たるロココ調には目を見張る。広い庭園は巨木ともいべき高い木々に区切られた空間のあちこちにある建物は目を楽しませてくれる。当時のヨーロッパ全体で高まったシノワズリー熱の所産として、黄金調の中国式茶館がある。高い木の中に葉の色がやや黒い血の色のものが目についたが、血ブナといって日本にもある由。サン・スーシ宮（無憂宮）の東端にフリードリッヒ大王と彼の愛犬の墓が並んでいる。わづか1m四方である。大王は「愛犬のかたわらに眠りたい」と1786年に遺言したが、守られぬまま他の場所に葬られていたが、1991年8月に200年振りに安住の地を得た。王妃との仲は、最初7年間ともに暮らした後、46年間別居し、王妃をサン・スーシ宮に呼ぶことはなく、他の婦人の来訪もまれで、大王の姉ウィルヘルミーネは、この宮殿を修道院と評した。大王は日常的にはフランス語を話した。同時に外国語を多く交えた怪しげなドイツ語をしゃべりかつ、書いた。ポツダムではツェツィーリエン宮の方が小さいだけに、見学者で溢れていた。プレーメンとエッセンからの家族と言葉を交わした。自分たちドイツ人の運命が決定された、この場所に関心が深いらしい。この宮殿は第一次大戦の末期、1917年に完成し、あのカイゼル・ヴィルヘルム2世の長男、皇太子が同妃に献じた別荘である。皇太子は有名な「イギリス好き」Anglophilで、彼のライブラリーは、その半分の蔵書は英語のものであり、彼の曾祖母はあのイギリスのヴィクトリア女王であるから、別荘の外観がテューダ朝風になっているのも偶然でなかろう。ツェツィーリエン宮の中のレストランで昼食を撮った。大きなサーモンを白ワインで味わった。少し焼きが浅いと思ったが、充分美味であった。

フィナンシャル・タイムズ25/26/27. May. 1996. 旅行ページで、この別荘の一部

をなすホテルを紹介する。Schloss Cecilienhof, price from DM 165(single) DM 280 (double)。



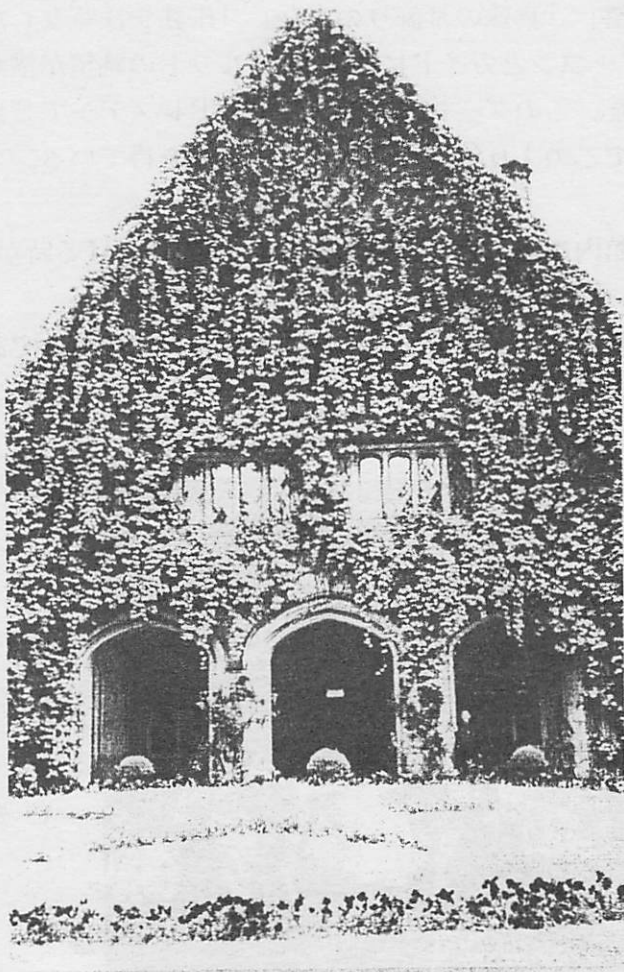
(サン・スーシー宮)



(中国式茶館)



(フリードリッヒ大王の墓)



(ツエツイーレン宮)

ポツダムからホテルに帰るとかねて希望していたベルリン・フィルの切符が幸運にも届いていたが、3夫婦×2人＝6人に3枚。3家族に1枚ずつの割当。いづれも亭主たちの手に入ったが、一方細君たちには、ベルリン・コンツェルトハウスでのベルリン・シンホニーの切符が手に入り、各夫婦とも平和を保たれたのは良かった。切符は、正規価格の30～40%増。貴重な自由時間をどうするか。ダーレムにあるベルリン美術館に行こう。タクシーの運転手に「統一後の暮らし振りはどう変わったか」と話している内に着いた所は有名美術館にしては、いやに閑静なたたずまい。2台の車で出発してもう1台が来ないので、可成りやきもきした。ここは実は裏門。もう1台は正門に着いて、こちらもやきもき、「君の名は」ベルリン篇はやがて解決したが、その間、展示品を見ないで、人探しに早足で過ぎる日本人は異様に見られたにちがいない。このダーレム美術館は絵画館やその他五つの博物館を持つ総合美術館。絵画館は世界的に有名で美術史の巨匠の代表作が、次ぎ次ぎとある宝の山。ネーデルランド・フランドル美術館ではブリューゲル、ルーベンス、レンブラント、フェルメール。イタリア美術ではジョット、ボッティチェリ、ティツィアーノ、カナレットと続く。勿論、地元ドイツでは、デューラー、クラナッハ。フランス、スペイン、イギリスはもう書き切れない。中で、フェルメールは昨秋、今春とワシントン、オランダのハーグと作品展があつて、現存全作品35点の中から、21点、23点展示され、空前の評判をよんで、30万枚、35万枚の切符は忽ち売切れる。日本から行って徹夜で発売を待っている人がテレビで紹介される熱狂振りであった。私は、昨年春、ハーグとアムステルダムで「デルフトの眺望」「真珠の耳飾りの少女」「牛乳を注ぐ女」など計7点を見ることが出来たし、特にツアーコンとガイドに頼んで、デルフトの眺望が描かれたその場所に行って大いに満足していた。このダーレムで2点、後のドレスデンで2点と、見られたのは幸いであり、あちこちでこの10年に20点以上、眼福を得ている。上の4点はハーグで展示されていない。

僅かな時間で全館これ名画という館内を回るカミカゼ鑑賞もやがて、切上げる時が来た。もう一度、次はゆっくり来たいと思いながら去った。

土、日曜に当たったベルリンでは買物は全く出来なかったが、その分、マイセンで高い埋め合わせをすることになる。

ケーダムでの夕食も慌ただしく、ベルリン・フィルハーモニーへ行く。



(ケーダム通り)

着いて初めて曲目を知って喜ぶ。

- 曲目. 1. ドボルジャーク、オペラ オテロ序曲
2. ベートーヴェン ピアノ協奏曲第3番
3. ドボルジャーク 交響曲 新世界から

ベルリンフィルハーモニー交響楽団、指揮クラウディオ・アバド。その上、ピアニストはアルフレッド・ブレンデル。ブラビッシモである。

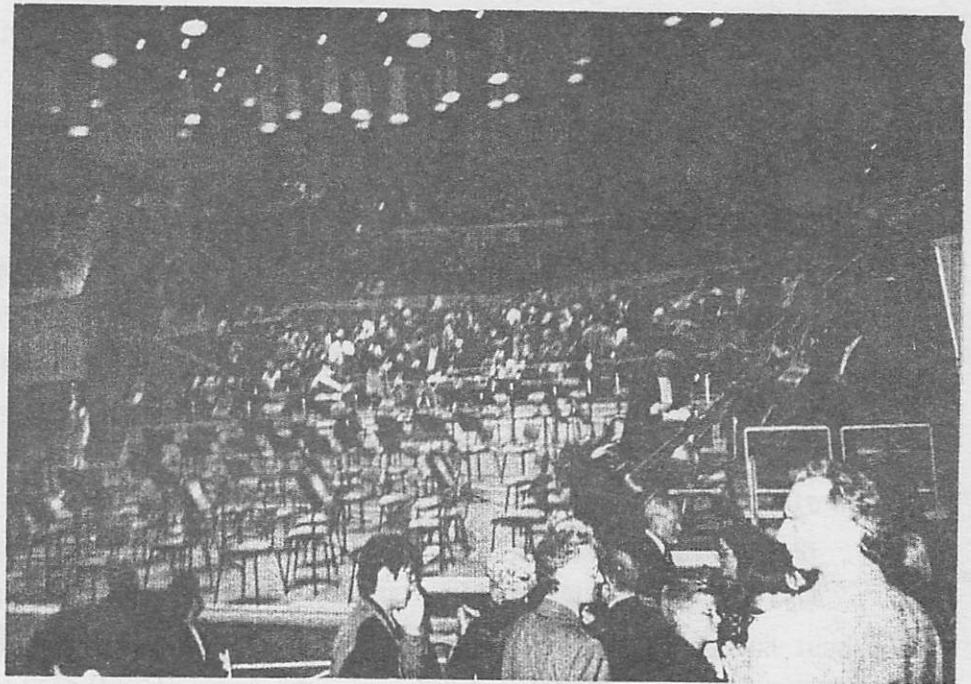
日本の聴衆、女性80%、平均年齢30才以下とちがって、男女二人連れが多く、年齢はプラス10才。服装は威儀を正す感じではないが、キチンとしている印象。例のサントリーホールがここに範をとった、ブドウ畑風デザインは一層、客席がステージを取囲み、ステージは客席から見上げるのではなく、7列目の席からも同じレベルに感じられ、ずっと身近な気がした。一人当たり空間容積は世界の一流ホール中最大の由でゆったり坐れる。

1992年の改造により音響の良さは高まったといわれる。アバドは若々しい足取りでさっと壇上に上る。眞横に近い斜め後からの角度で横顔を見て、細やかなタクトの振り方もよくわかる。繊細な印象。ブレンデルは正規のステージの前に特別に作ったステージが持上り、そこのピアノに坐ると、殆ど、ブレンデルの顔が眞正面に見られる位置となる。何か口ずさみながら演奏している表情、強いタッチの際は頭がグラグラ揺れ、時に顔面を一瞬ケイレンが走る。最後は全客席スタンディング・オベーションで幕が降りた。よく知っている曲をきめ細かく聴くことができ、興奮と幸福感を覚えつつ帰路につく。別行動のご婦人方もハイドンのミサ曲などに満足していたのは何より。ソリストの声、形が良かったらしい。

さて、今日はライブチッヒ経て、ドレスデンへ。

ベルリン市外に出ると殆ど起伏のない平野を高速で走る。道の両側は一面緑の野原と思っていると、黄色の部分が見える。菜の花が眞っ盛りに咲いている。

「菜の花ばたけに、入り日うすれ…」の唱歌から、あるいは二宮



(ベルリン・フィルハーモニー交響楽団：演奏会終了後)



金次郎が菜種から油をとって夜勉強した話からどうい
うわけか、日
本的情景と思
い込んでいた
ので、目を見
張って眺めた。
後で調べると
菜種はヨーロ
ッパが原産地
で、セイヨウ

(菜の花畑)

アブラナという、日本とは別の種らしい。やがて「間もなくエルベ川を越えます」と案内が入る。そういえば、アメリカ兵とソ連兵が橋上で平和を誓って握手している写真は「エルベの誓い」の名前だった。 駄句二つ。

あちこちの 菜の花うれし エルベ越ゆ

菜種咲いて ザクセンの野は うすぐもり

エルベ川はチェコのズデーテン山地に発してドレスデンからハンブルグに至る大河で東ドイツを東西に二分して流れる。ドイツの歴史を覗いていて分りにくいのは色々の領邦の名が出て来ては、離反集合しては、互いに戦うという国である。色々の事件を起こしてくれ
る中で、プロシャ・バイエルン・ザクセンなどは代表選手としてなじみがある。ザクセンは中世以降、時にドイツ第一の強国ともなった位で、高い文化を誇る国であった。ドイツに限らず、ヨーロッパでは地域主義というか、郷土愛、郷土意識が強烈であり、イタリアのバスの運転手が「自分はイタリア人でなくヴェネチア人だ」というのを聞いたことがある。ドイツ帝国が1871年に成立してからも、1934年までは国籍上のドイツ人は存在しなかった。パスポートの国籍は、プロシャ、バイエルン、ザクセンとなっていたという。現在のドイツも連邦であって州は独自性を保っている。

ドイツの有力誌シュピーゲル96年8月5日号の表紙にはザクセンの大きな文字が躍っている。ザクセン州政府首相 Kurt Biedenkopfが、中世のヨロイに身を固め白馬に打ちまたがって駆けゆく雄々しい勇姿である。説明に曰く "König Kurt macht sich stark gegen den Rest Europas." この姿は、1694年に即位したザクセン選帝侯アウグスト1世(強王)の彫刻からとったパロディである。フォルクスワーゲン社がザクセン州へ投資するので、同州は補助金を出して、経済振興、雇用拡大を期待しているのに対して、EU委員会から異義が出されたが、同首相はこれを受付けず一歩も引かない姿勢をとっているのである。成行はどうなることやら。本文の文章の見出しは次の通り。 „ Die größten

Spinner ” この Spinner とは辞書に「頭の変な奴」と出ていた。最高に立派だが、変な人？か。

ライプチッヒの市内に入る。東西統一の口火を切った月曜の行進はここで行われましたと説明を受けているうちに聖トーマス教会が見えてくる。個人的にはライプチッヒ観光の目玉と考えている所。バッハが27年もの長い間、同教会のカントールを務め豊かな作品を残した。教会の正面近くにバスは着いたが、高い教会が道路のすぐ近くに建っていて、しかも教会には珍しく、高い木があって、写真がとれない。昼食後、裏手で離れた場所でやっと写真がとれた。バッハのマタイ受難曲は有名だが、数年前香川県民ホールの柿落しで上演された記憶は今も新しい。その時の福音史家役のペーター・シュライヤーが昨年度、福音史家役と指揮者を兼ねる上演が大阪フェスティバル・ホールであって見に行った。ソロリストとしては客席に向かわなければならないし、指揮者としては、オーケストラや合唱隊の方に向かわなければならない。シュライヤーはステージ中央のやや後方の位置で客席に面し、オーケストラは、ステージの左右に分かれて、指揮者を見上げる形でうまく解決していた。トーマス教会は、13世紀に創設され、バッハの時代プロテスタント教会とし



(聖トーマス教会)

て、ライプチッヒ市民の宗教生活で中心的役割を果たしていた。落ち着いた、荘厳ともいえる雰囲気を感じて、歩むと祭壇の前にバッハの墓があって、バッハ巡礼者の捧げる花は絶えることがない。教会横のバッハの銅像を撮り、すぐ前のバッハ博物館をたづねたが残念にも休館だった。バッハと並ぶライプチッヒ観光はゲーテである。記念像を見てから、彼のよく通ったという地下酒場アウアーバッハス・ケラーに行く。ファウストとメフィストフェレスの像を目印に降りて、コーヒーを飲んだ。この店のバッジを10ヶ以上おみやげに買う日本人がいても在庫切れになることなく、私も1ヶもとめることができた。森鷗外も学んだ名門ライプチッヒ大学は道路のそばにスポンとそびえるビルで、普通キャンパス付きの大学をイメージとして持つ身にはヘンである。大きな壁面に群像が描かれ、その中心にマルクスが一きわ大きく描かれていた。大学のすぐ側で、スキンヘッドの少年たちに遭う。ロンドンなどちがってあどけない感じ。写真をとらせてくれというとおだ

やかに応じた後、一寸した物を渡すとダンケと笑顔で去って行った。



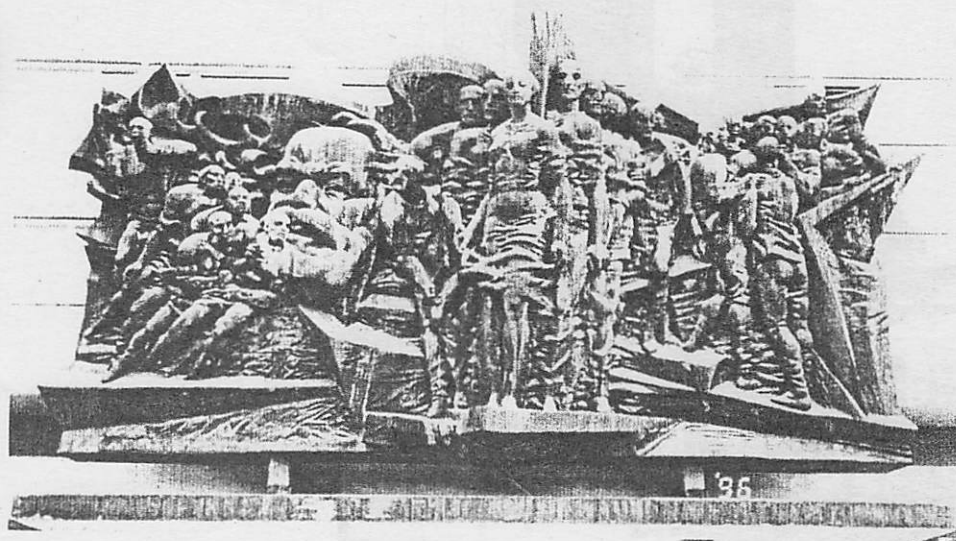
(バッハ像)



(「今週のゲーテの言葉」：昼食を摂ったレストランで)



(ライプツヒ大学)



(ライプツヒ大学の壁面)

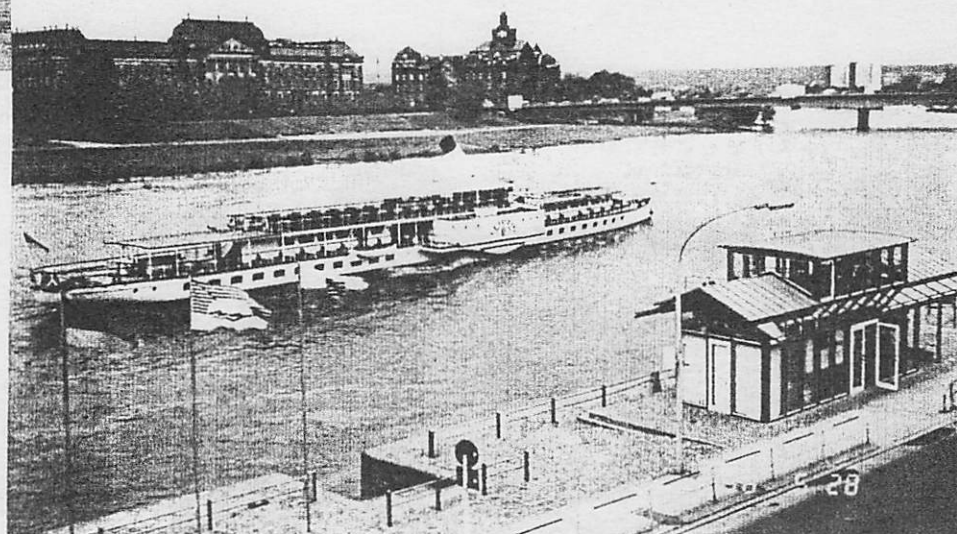


(ドイツの若者達：ライプツヒで。)

ライプツヒを離れて、間もなく、戦勝記念碑に着く。1813年ナポレオンを破ったライプツヒ会戦の勝利を記念して100年後に建てられた。高さは91mにも及ぶ構築物でその圧倒感に辟易する思い。因みにNY. 自由の女神像は46m。おして知るべし。少し太陽が傾き始める頃、ドレスデンが遠くに見え始める。1945年2月一度の爆撃としてはヨーロッパ最大の規模で大きな被害を受けた。泊ったヒルトンの前の聖母教会は今も無残な姿で、戦争を忘れないために、瓦礫の山のままにされているが、漸やく再建の運びと聞いて、救われる気持ちになる。



(聖マリア教会)

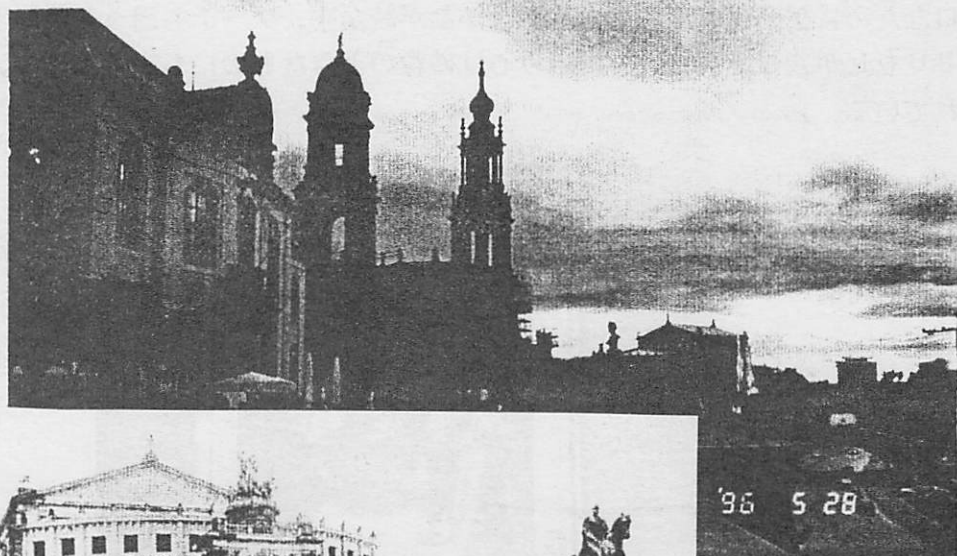


(エルベ河)

ホテルの裏はすぐエルベ河であり、部屋からも斜めに見ることができる位近い。夕方、エルベに沿って10m位の高さが続く、ブリュールのテラスに行く。ゲートはここをヨーロッパのバルコニーと呼んだが、ここからの美しい眺めを楽しめばドレスデンが「エルベのフィレンツェ」といわれる理由がわかる。目の前のエルベの流れには恰好の良い遊覧船が4隻、5隻と浮び、川向こうの市街には、教会とか良いスタイルの家が建ち並ぶ。野暮なビルなどない。上手、下手の橋も美しい。左方、西の空には白雲が夕陽に染められつつ浮かんでいる。更に左手には、ゼンパー・オーパー（ザクセン州立歌劇場）がどっしりと重厚な姿で坐っている。吹く風は大分涼しいや寒くなって来た。白ワインの酔いもさめ始めた。



(ドレスデンのテラス)

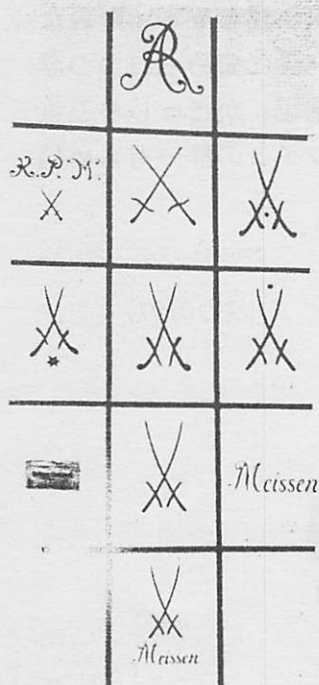


(ゼンパー・オーパーの遠景)



(ゼンパー・オーパー)

翌日先づマイセンへ。見るだけの積もりが、人並みに買うことになる。ドイツでの買物はここだけしか出来ないと思いつつ、クレジットカードを取出していた。



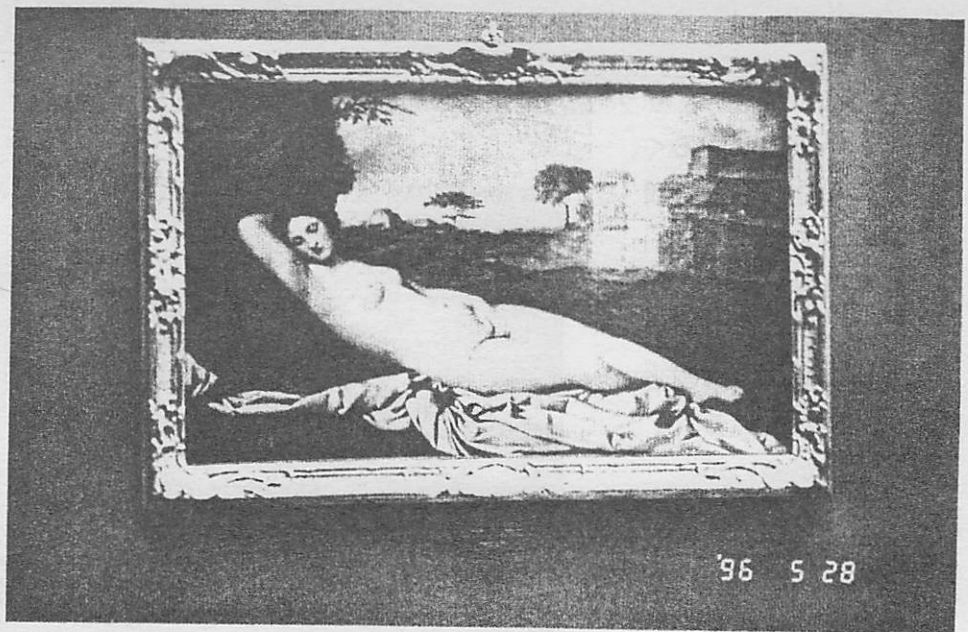
ドレスデン市内に帰る。美術館に入る前にゼンパー・オーパー前に立つ。昔、C. M. ウェーバーやR. ワーグナーが音楽監督を勤めた名門。「さまよえるオランダ人」や「タンホイザー」も初演された。5月下旬のドレスデン音楽祭で、当夜は、死去100年のブルックナーとシェーンブルグ。指揮はシノーボリ。ドレスデン美術館に入る。ここも名品の豊富な宝の山である。短かい時間で見るのは勿体ない。ラファエロ「サン・シストの聖母」ジョルジオーネ「眠れるヴィーナス」フェルメール「手紙を読む女」「娼家にて」外、ボッティチェリ、デューラー、クラナハ、ルーベンス、レンブラント、ワトーと続く。ティティアーノ、カナレットも洩らせない。カナレットはドレスデンに住み、七年戦争中、フリードリッヒ大王のプロシャ軍に破壊されたドレスデンの姿、再建中の姿を細密に描いている。

美術館は二ヶ所に分れ、実際に行ったのはアルテ・マイスターで、ノイエ・マイスターには行かなかった。ノイエ・マイスターにはドイツロマン派、C. D. フリードリッヒの作品が、多くあり見たかったのだが、アルテ・マイスターのショップで彼の画集を買って、気持ちをなぐさめた。フリードリッヒは当地に

(マイセン陶器のマーク:時代とともに変わる) 住んで活躍しゲーテに認められ、時に会うこともあったが、無口なためにゲーテが話してもなかなか話が续かず、ゲーテも困ったという。そんなフリードリッヒが残した言葉。「神のみ心は砂粒のようなものにも宿っている。いたる所にあふれている。」



(「サン・シストの聖母」:ラファエロ)



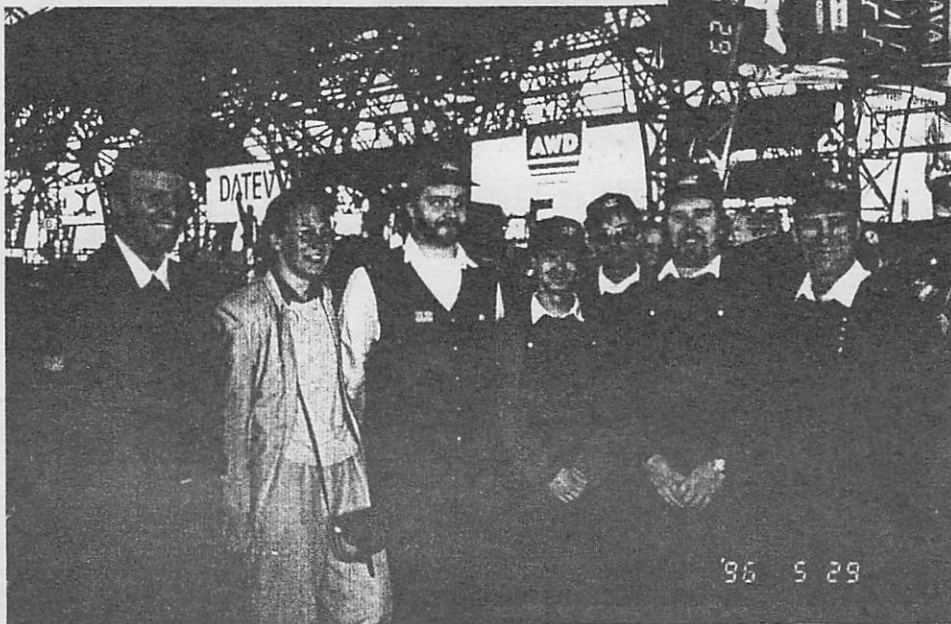
（「眠れるヴィーナス」：ジョルジオーネ）

翌日ドレスデンからプラハへの特急の旅、2時間半。
ドレスデン駅での風景、

- ① Spargel 白いアスパラガスで
ウィナソーセージ位のもの。いかにも
たっぷり成長した感じで食欲をそそる。
1束、10本位で、1.5DM、安い！
- ② プラットホームにいる荷役作業員は、
赤帽と赤の上衣。これならよく目につ
きやすい。



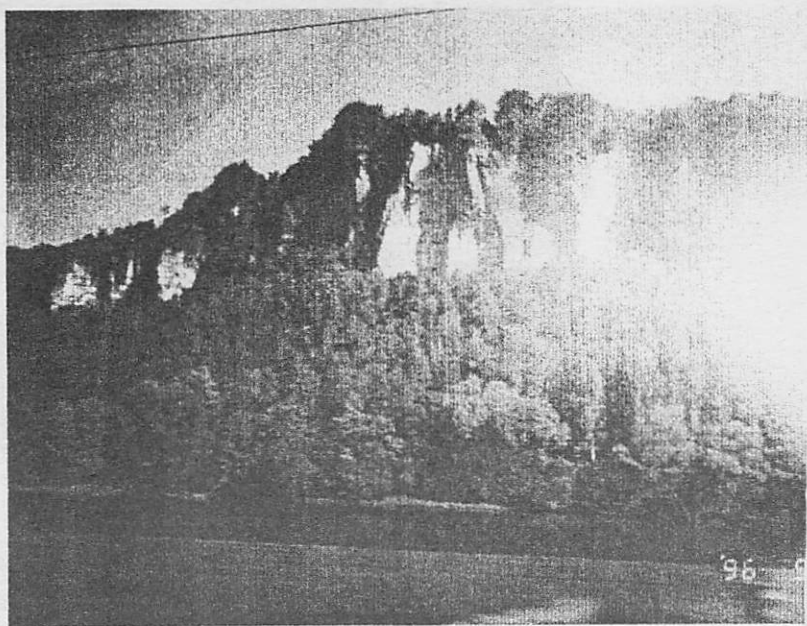
（白アスパラガス）



（ドレスデン駅の赤帽の人達）

途中、エルベ沿いにザクセンスイスの奇岩を仰ぎ見る事が出来た。

プラハの街は明るく、
全くの青空、気温も前
日のドレスデンより
10度は暖かそうで
ある。人形の出る時計
やカレル橋周辺は観光
客であふれている。
ドイツ人が多いが、
フランス人、イタリア
人、イギリス人、アメ
リカ人も。フランス人
と少し言葉を交わす。



(ザクセンスイスの砦)

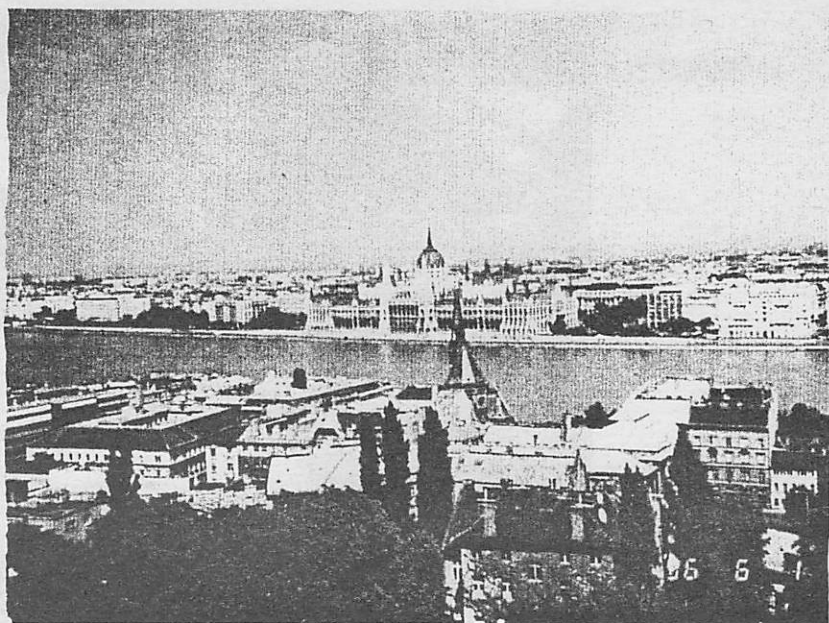


(ウ・フレーク酒場:チツは楽器の口に入れる。) 一つ買った。

有名酒場ウ・フレークで、日本人のためにスキヤキソングが演じられ、ドイツ人の家族は、カチューシャの歌でダンスを楽しんでいた。

ブタペストの街は、ドナウ河で、ブタとペストに分かれる美しい街である。青空の下、

気温は32度にもなる。
 ドナウ河下りの遊覧船
 に乗って、ドナウの流れ
 の中の中州の島に差
 しかかるとまだ朝の
 10時に、もう水着で
 日光浴を楽しんでいる
 多くの人々がいる。
 写真をとって、暫くし
 て、周囲の人を見ると
 前と横の若者が話して
 いるのは、ドイツ語ら
 しい。

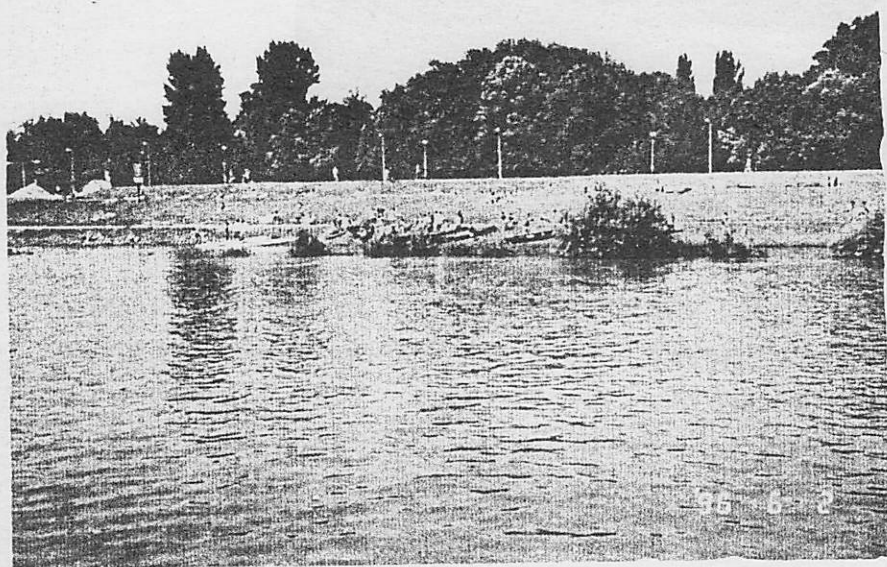


(ブタペスト)

話して見るとミュンヘンから来て1週間ハンガリー周遊中という。中の一人が、口ヒゲを生やしているが19才と聞いて、おどろいた。下船近く、彼らに求められたのは、最初に
 Prosit、次に

Ich liebe dich を日本語で何というか、ローマ字で書いて欲しいと。「私はあなたを愛します」と書いて渡したけれど、ずっと気になっている。日本語ではめったに「私は」と言わないし、dichとあなたとは合わない。

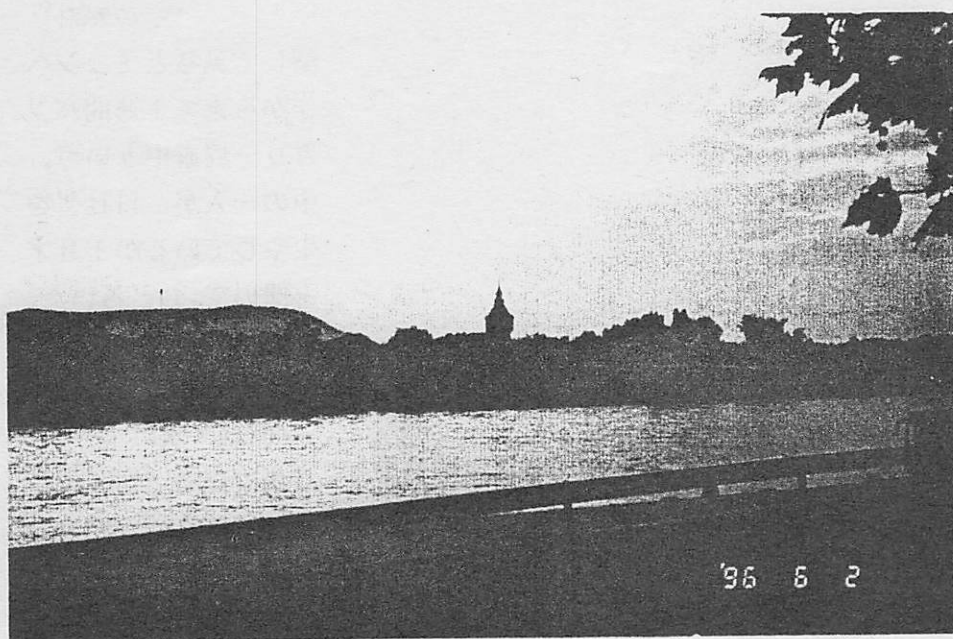
「愛しているよ」「好きだよ」もどこがちが



(ドナウ河)

う。どなたか正解を教えて欲しい。

(ドナウ河の遊覧船上で)



(ドナウ河のSunset)

地図の上とちがって、ブタペストは、実際の旅行ではロンドンよりも遠い。まあそのため
にフランクフルトの街を歩けるのは結構である。古い町の姿の所どころには、現代的な
ビルが見えてくる。今回の旅行で、ショパン、キューリー夫人、ドボルジャークの生家
を訪れたが、ここではゲーテの生家である。一昨年行ったシェイクスピアの生家と比べると、
200年の差と、社会階層の差もあって当然ゲーテの方がずっと上である。シェイクス
ピアには無かったが、こちらには、ゲーテの父親の立派な書斎がある。本棚を見ると
Dizionario Tedesco-Italiano、独伊辞典がある。ゲーテは多くの外国語とともにイタリア
語も堪能で、2年以上のイタリア旅行も楽しんでいる。彼の「イタリア紀行」でブレン
ナー峠を下って、イタリアへ入って、初めての宿に入り、散歩に出て、イタリアの印象を楽

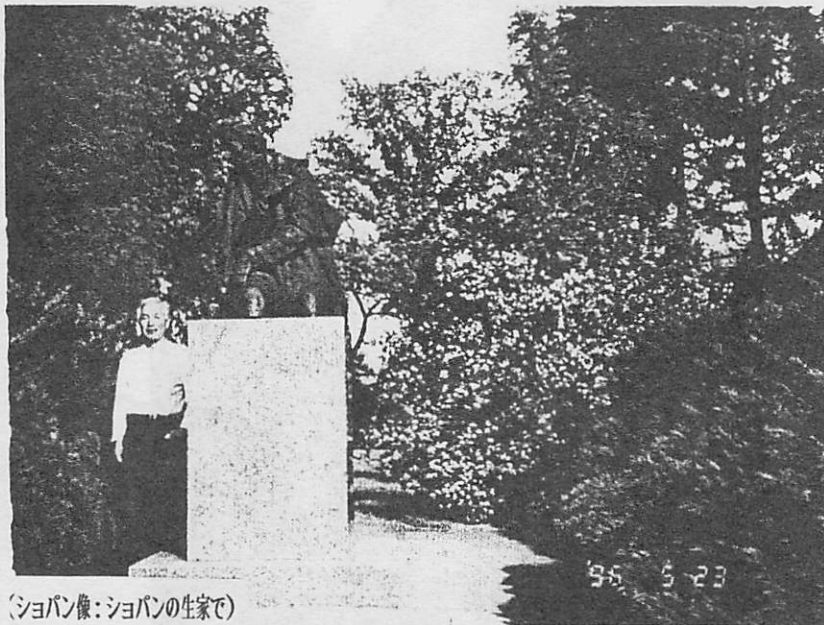
しんだ後、部屋に帰ってから、三つのものがないことに気が付く。先づ錠前が無いこと。次に窓ガラスがなく、油紙が貼られていること。最後に用を足す所がないこと。宿の主人に質問すると、答えが良い。「どこでも好きな所で」(Da Per Tutto, Dove Vuoi)とイタリア語で書かれているのは、印象的だったからと思われる。私にも印象が深く、ここを読んで、イタリアに行く時は、イタリア語を習って行こうと考えた。そのゲーテは父親からよくイタリアの話聞かされ、長い間イタリア行を希望していたというから、彼の旅行の原点が、この辞書にあると、しばし眺めていた。

ドイツ文学を研究している大学教授の友人に言わせると、「ドイツの若者はゲーテを読まない。トーマス・マンも読まない」ウエルテルの悩みに出ていたと思うが、「過去をして過ぎ去らしめよ」という事になるのだろうか。

Im wunderschönn Monat Mai の旅は、楽しい旅であった。

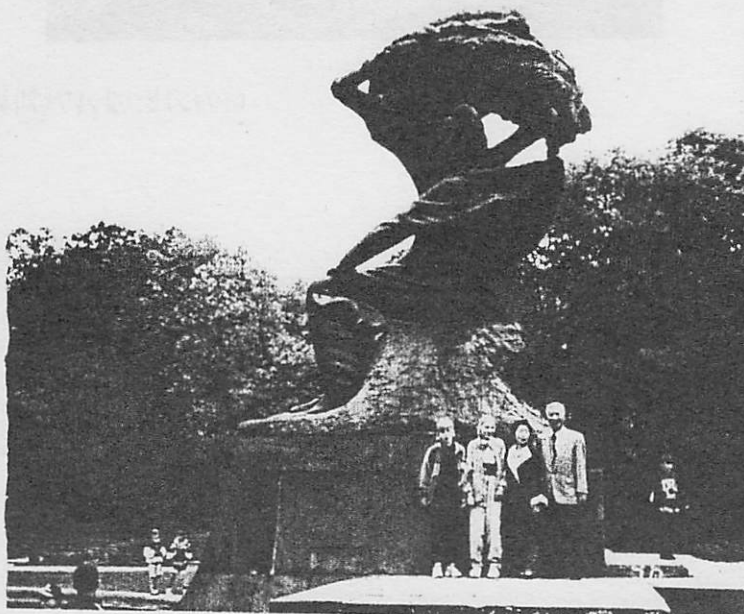
ワルシャワの美人ガイド、イヴォンナ(写真)の話

「ポーランドでは4月23日の聖ゲオルギウの日から、春が始まると言われている。



(ショパン像：ショパンの生家で)

しかし今年の春はまったく狂っていて、暖かい日のあと突然急に寒い日が来たり、その逆だったり。」ワルシャワ到着の日、ショパンの生家を訪ねて、我われ25名だけで、ショパン専門のピアニスト(ワルシャワ音楽院教授)の素晴らしいリサイタルを聞くことから、旅は始まった。最後の夜はブタペストでジプシー音楽のディナーショーを楽しんだ。プラハではドボルジャークのコンサートを少人数でたん能出来た。色々の興味ある見聞、昼、夜、毎回ビア、ワイン付きの食事などつきぬ思い出となって



(ショパン像：ワルシャワ、ワジキ公園で)

いるが、これからも可能な限り、次の旅を求めて生きるという同行者共通の願いを持ちつつ旅の終りを迎えた。旅の楽しみは、①行く前②旅行中③その後、それぞれにあるというが、予めその土地の歴史や文化を知って、また土地の人々と多少でも触れ合えば、楽しみは一層増すものだろう。ドイツに行きたければ、ドイツ語をもっと勉強するように、という声がどこからか聞こえて来る。

Ich möchte nochmals nach Deutschland fahren.



(イヴォナ嬢：ワルシャワ大学日本語科出身)

ハイネの詩、最近見る機会がありません。味わって見て下さい。

Im wunderschönen Monat Mai

ハイネ詩集 「歌の本、Buch der Lieder」(1827)

シューマン30才、作曲「詩人の恋 Dichterliebe」OP. 48.

(1840)

Im wunderschönen Monat Mai

Als alle knospen sprangen.

Da ist in meinen Herzen

Die Liebe aufgegangen.

素晴らしく美しい五月に

蕾がみんなはじけると

その時私のところには

愛が溢れて昇っていった。

Im wunderschönen Monat Mai

Als alle Vögel sangen.

Da hab ich ihr gestanden

Mein Sehnen und Verlangen.

素晴らしく美しい五月に

鳥たちみんな歌を歌うと

そこであの人に打明けた、

私の憧れと求めとを。

§ § § § § § § § § § § § § § § §
§ ドイツ文化紹介 §
§ § § § § § § § § § § § § § § §

《訳詩四編》

テオドール・シュトルム作
田 淵 昌 太 訳

緑ひとひら

夏の日の 若葉ひとひら
さすらいの 森の小径に
ああ この胸に浮かぶのは
こずえの鳥の たかきさえずり
こもればごしの ふかき新緑

夕べに

白すみれ 夜に香りたち
朱に染まるは 君の唇
あこがれ にわかにたちのぼり
この夜に 君をさがしもとめる

十月のうた

霧がおりてくる 木々は葉を落とす
さあワインを注ごう まろやかなワインを
重い灰色の空を 金色に
金色に輝かせよう

どこか遠くでは
ああだこうだと騒々しくやってはいるが
この世界は この美しい世界は
けっして滅びることがない

心がすすり泣くようなとき
グラスをあわせよう こちよく鳴らそう
真実な心は滅びることがないと
私たちは知っている

霧がおりてくる 木々は葉を落とす
さあワインを注ごう 優美なるワインを
重い灰色の日々を 金色に
金色に ひかり輝かせよう

もうすっかり秋なのだ
また春がきて 空もすみわたり
世界がすみれの園にたたずむまで
すこしだけ辛抱しようじゃないか

寒い季節の訪れだ
でも真実の友よ
また春がめぐってくるまで
この季節をともに楽しもう

みずうみ

すみれほのかに 香りたち
おもかげ淡くも 消えゆきぬ
ひと知れず咲く その花と
過ごせし日々は はかなくも

ドイツ連邦共和国

ドイツ連邦共和国
首都：ベルリン
面積：356854km²
人口：8130万人

資料提供：連邦統計局



ブレーメン州
首都：ブレーメン
面積：404km²
人口：70万人



ラインラント=プファルツ州
首都：マインツ
面積：19849km²
人口：390万人



ハンブルク州
首都：ハンブルク
面積：755km²
人口：170万人



ザールラント州
首都：ザールブリュッケン
面積：2570km²
人口：110万人



バーデン=ヴュルテンベルク州
首都：シュトゥットガルト
面積：35751km²
人口：1020万人



ヘッセン州
首都：ヴィースバーデン
面積：21114km²
人口：590万人



ザクセン州
首都：ドレスデン
面積：18341km²
人口：460万人



バイエルン州
首都：ミュンヘン
面積：70554km²
人口：1180万人



メクレンブルク=フォアポンメルン州
首都：シュヴェーリン
面積：23559km²
人口：190万人



ザクセン=アンハルト州
首都：マクデブルク
面積：20607km²
人口：290万人



ベルリン州
首都：ベルリン
面積：889km²
人口：340万人



ニーダーザクセン州
首都：ハノーヴァー
面積：47351km²
人口：760万人



シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州
首都：キール
面積：15731km²
人口：270万人



ブランデンブルク州
首都：ポツダム
面積：29056km²
人口：260万人



ノルトライン=ヴェストファーレン州
首都：デュッセルドルフ
面積：34070km²
人口：1770万人



チューリンゲン州
首都：エアフルト
面積：16251km²
人口：260万人

(「ドイツの偉人とその都市」：ドイツ連邦共和国新聞情報発行より)



人口100万以上

人口10万以上

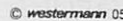
国境

連邦州境

連邦首都

連邦政府所在地

Mainz 州首都



— 71 —

お知らせ

(I)

*西原 浩様から在ドイツ日本人会の情報提供をとのご要望がありましたので、早速、在ドイツ日本大使館および総領事館へ照会を致しました。その結果、ご返事を頂けました日本人会の連絡先等につきまして、次のとおりお知らせいたします。

・ハンブルク日本人会
Nihonjin Kai e.V.
Stadthausbrücke 5
20355 Hamburg
TEL 040-37519609

・ブレーメン日本人会
Motoko Römer
Neuestr. 21
27793 Wildeshausen
TEL 04431-3545

・デュッセルドルフ日本クラブ
Japanischer Club
Düsseldorf e.V.
Marienstr. 22
40212 Düsseldorf
TEL 35 09 09
FAX 36 96 41

・ミュンヘン日本人会
Japan Club München e.V.

代表者の氏名： 宮尾 清一

所属の会社（団体）：鍼医

任期： 1996年5月ー

連絡先： 専用事務所 Löwengrube 10/II TEL:089-220097

D-80333 München FAX:089-2285935

会員数：正会員436世帯 特別会員（法人会員）82社 96年8月現在

・シュトゥットガルト日本人会
Japan Club Stuttgart e.V.

代表者の氏名： 山田 光義

所属の会社（団体）：SONY-WEGA produktions G.m.b.H

任期： 1996年1月ー1997年12月

連絡先： c/o SONY-WEGA produktions G.m.b.H
Stuttgarter Str.106

70736 Fellbach

TEL:0711/5858221

会員数：法人会員 31 個人会員 48 学生会員 5 協賛会員 16

・日本人会ウルム
Japan Club Ulm

代表者の氏名： 黒河内ショスト万貴子

所属の会社（団体）：—————

任期： 1996年1月—1997年1月

連絡先： 会長宅 Wendelinusweg 15 TEL:07305-5328
89079 Ulm FAX:07035-23409

会員数：家族会員 25 個人会員 3（子供会員も入れた総数 78名）

♣在ボン日本大使館領事部の中嶋様からは、ボンには日本人会はありませんとのこと
す。「独日協会ボン」の紹介がありました。皆様よくご存じですが、資料の一覧性の
ために掲載いたします。

・独日協会ボン：Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V. TEL/FAX：
c/o Marianne Mönch 0228-348365
Auf dem Köllenhof 47, 53343 Wachtberg-Ließem

♣在フランクフルト総領事館の山田俊哉副領事様からのご連絡によりますと、フランク
フルトには、日本人会はないそうです。そこで、ご参考までに「フランクフルト法人
会」がありますので、この会について、つぎのとおりお知らせしますとのことです。

・フランクフルト日本法人会
連絡先：c/o Bank of Tokyo-Mitsubishi
(Deutschland) AG
TEL:(069)71760

♣在ベルリン総領事館からの返事では、ベルリンには「日本人会」はないそうです。
そこで、ご参考までに次の団体をご紹介しますとのことです。

・独日協会：Deutsch-Japanische Gesellschaft
代表者：Herr Günther Haasch
住 所：Tiergartenstr.24/25 10785 Berlin
電 話：+49 30 262 92 92

・ベルリン日本商工会：
Japanische Industrie-und Handelsvereinigung in Berlin e.V.
代表者：Herr Munehisa Takeya
住 所：Am Sandwerder 3 14109 Berlin
電 話：+49 30 803 60 70

※なお、ご参考までに在ドイツ大使館、総領事館の所在地等について、外務省広報課でお尋ねしましたので、合わせて掲載いたします。

- ・在ドイツ 日本大使館：Japanische Botschaft
住 所：Godesberger Allee 102-104, 53175 Bonn, Bundesrepublik Deutschland
電 話：(49-228)81910
F a x：(49-228)379399
- ・在ドイツ デュッセルドルフ総領事館：Japanisches Generalkonsulat
住 所：Immermannstr. 45, 40210 Düsseldorf,
c/o. Deutsch-Japanisches Center, Bundesrepublik Deutschland
電 話：(49-211)16482-0
F a x：(49-211)35-76-50
- ・在ドイツ ハンブルク総領事館：Japanisches Generalkonsulat
住 所：Rathausmarkt 5, 20095 Hamburg, Bundesrepublik Deutschland
電 話：(49-40)3330170
F a x：(49-40)30399915
- ・在ドイツ フランクフルト総領事館：Japanisches Generalkonsulat
住 所：Hamburger Allee 2-10, 60486 Frankfurt am Main,
Bundesrepublik Deutschland
電 話：(49-69)9708230
F a x：(49-69)773873
- ・在ドイツ ベルリン総領事館：Japanisches Generalkonsulat
住 所：Wachtelstr. 8, 14195 Berlin, Bundesrepublik Deutschland
電 話：(49-30)850893-0
F a x：(49-30)8326967
- ・在ドイツ ミュンヘン総領事館：Japanisches Generalkonsulat
住 所：Prinzregentenplatz 10, 81675 Muenchen,
Bundesrepublik Deutschland
電 話：(49-89)47-10-43-5
F a x：(49-89)47-05-710

以 上（編集担当：藤本）

お知らせ

ホームステイの募集について

(Ⅱ)

事務局では、ボンでのホームステイを希望される方および香川県内でボンからのホームステイの希望者を受け入れて貰えるご家庭を募集しています。ボンでのホームステイ希望者、ボンからのホームステイ受け入れ可能な方は、次の所へご連絡ください。

なお、募集は、年間を通じて行なっておりますので、よろしくお願いします。

(ホームステイ担当：高木文夫様より)

・高木 文夫

〒761-04 高松市亀田南町368-4

TEL (0878) 47-4793

FAX TELに同じ。

・香川日独協会事務局 (羽白 洋事務局長)

〒761-07 木田郡三木町池戸1750-1

香川医科大学ドイツ語研究室内

TEL (0878) 91-0822

FAX TELに同じ。

[編集担当からのお知らせ]

- (1) 1994. 10. 18に「ボン日独協会」との姉妹協会提携を記念して、高松市中央公園内に植えられました「樅の木」が、原因は分かりませんが、二度枯れました。

このたび、三代目が、住谷幸伸様のお計らいで植えられましたとの連絡が、中村副会長さんからありましたので、お知らせをいたします(編集担当藤本)。

- (2) 観音寺市一ノ谷小学校の皆さんが、1996年9月24日から6日間、10年余り交流を続けるドイツ西部のラインランド・プファルツ州のオークスト校を訪問し、友好を深めました。この模様につきまして、一ノ谷地区国際交流実行委員会委員長の川人洋造氏と一ノ谷小学校長の本田進氏が、地元の「いちのたに」誌に掲載したものを中村副会長さんのところへ送ってこられました。都合により本号では詳しくお伝えできないこととお詫び致します。次号で詳しくご紹介したいと思いますが、その前に、必要な方は、編集担当の藤本までご連絡ください。お届けさせていただきます(編集担当藤本)。